
虹の彼方へ

みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹の彼方へ

【ZU-1】

N
2
8
1
1
L

【作者名】

み
か
ん

【あらすじ】

[illegible]

アタシ神崎妃杏、ごくごくフツの高校2年生。

アタシには誰にも理解されない秘密があるの。

でもソレが、アタシのトンでもない波乱の幕開けだった――

満月の夜を境にアタシの身边は一変した。

アタシが2世紀未来の人間？

アタシが王位後継者?????

この10年近く、消え失せていたアタシの記憶がホンの些細なきっ
かけで次々に甦るワ

かと思えば今までの事実が無くなるワ…

しかも一人っ子だったハズのアタシに突然お兄ちゃんが2人も現れ
て。。。

ワケ分からないままある人達に狙われて…。

把握しきれないままどんどんアタシの周辺は大変なコトに…………

覚醒

「璃音、お待たせ!」

ある晴れた土曜の午前中。

アタシ、神崎妃杏ひあんは親友の笹崎璃音りおんとの待ち合わせ場所にいた。

今ちょうど璃音が来たところ。

いつもは登校時に一緒なダケで、帰りはお互い部活（璃音）や生徒会やバイト（アタシ）で、バラバラなの。

だから2人で出掛けるのは物凄く久しぶり。

だから2人でムダにはしゃぐ…。

あーでもないだのこーでもないって、どうでもいいくだらない話を2人で話ながら歩いていると、1人の男の子（推定5〜6歳）が突然手を付いて転んでしまった!。

結構離れていたにも関わらず、アタシはその男の子の元へ駆け寄る。

「妃杏!」

璃音の声にも耳を貸さず、見てみぬフリのオトナにも気にせず。

親らしき人は見当たらず、後から友達らしき男の子2人が現れた。

我慢してグズリ気味の男の子に、アタシは笑顔で声を掛ける。

『痛くないよ、大丈夫!』

擦りむいているから、膝からは少し血が出ている。

手のひらも擦りむいちゃって…。

バッグからウェットティッシュを出して、男の子の手と膝を拭いてあげて、絆創膏も貼ってあげて完了!

小さい頃に、“困っている人を助けてあげるのがアナタの役目です”って教わって来たから昔っからこーゆーのってほっとけないんだけど…。

「妃杏!」

腕組みしながら眉間にシワを寄せた璃音が現れた。

璃音はアタシのこの“クセ”を全くと言ってイイ程に良く思っていない。

「どーしてアンタはいつもそうなのよ!今のご時世、イイコトしたって認められるとは限らないのよ?」

って、耳にタコが出来る程に言われてる。

だからアタシはその都度、決まってこっつ答える。

「んなのほっときゃいいじゃない!」

ってね。

アタシはスツと立ち上がって構わず歩き出した。

「ったくもう！」

すっかり呆れる璃音。

ママに言われたコトバじゃないコトは分かってるんだけど、それが脳裏に焼き付いて離れないの。

外が暗くなり始めてからアタシのテンションはMAXに近付く。

なぜなら今日は満月だから！。

特段天文に興味があるワケでは無いんだけど、空を見るのは大好きなんだ。

コレも昔から。

だから星や月がきれいな夜空は、たまらなく大好き。

それだけでテンションがあがっちゃうんだ→。

こついう日は、さっさとバスタイムも食事も済ませて部屋にこもるの。

紅茶かコーヒーを持ってベランダに出る。

その後はしばらく空を眺める。

ただ見るのもたまらないけど、それよりもっとたまらなく楽しみなコトがあるんだ！。

アタシが肌身離さず着けている天然石のペンダントがあるんだけど、これを月にかざすとこれがまた神秘的で幻想的な光を放つの。

その光を見るのが一番テンションアップするかな。

このペンダント、カットも研磨もされてない、おそらく原石。

うつすら紫がかったクリアな楕円形の、3センチくらいの石。

石を眺めているだけで心が落ち着くんだよね。

アタシの御守りのな存在。

でもこの石、とってもunbelievableなコトに、アタシ以外の人には一切見えないみたいなんだ。

初めは信じられなかったよ？

でも、そうみたい・・・。

アタシ、5歳の時にこの家（神崎家）に養女としてやって来たの。

その前に2年くらい、ひだまり園という児童養護施設にいたんだけど、そこに連れられてきた時のコト・・・

名前・誕生日・年齢は言えたものの、それ以外のコトは何も答えられなかったの。

で、職員さんに“何か手掛かりは？”って聞かれた時に、ペンダントを手に取って見せたんだけど、

不思議な顔されて、“何？”って言われちゃったんだよね。

ペンダントの継ぎ目のところに小さいプレートがあって、そこに

“妃杏 7.30”

って刻印されてたから誕生日が言えたんだけどね。

漢字で書けるのもこのプレートのお陰だったし。

プレートもチェーンも見えてないみたいで。

不思議と、気味悪さとか恐怖とかはその時から感じなかった。

“アタシにとって、命並に大切なモノ”

つてのも、何と無く脳裏に焼き付いてんだよね。

施設の人や仲間達・神崎のパパママ・璃音や学校関係の人にも見えないらしい。

だから、この石が何なのか自分で何を調べても分からないけど人に聞くコトが出来ないから石の名前も分からない。。。

石かどうか分かんないしね。

実はプラスチックのおもちゃだったりするかもね。

…なんて、罰当たりかな。

アレ？

えっ???

何???

石がぼんやりと白っぽい光を放っている。

こんなの初めてだよ？

!!!!!!??????

急にアタマに激痛が!!

アタマを抱えてしまっくらいの激痛。

………治まった。

石の光も治まってるし…。

、、、何だったの？一体。

あの白っぽい光もアタマの激痛も初めてだった。

何らかの石の力?・・・。

石のコト、不気味とか全く違和感を感じたコトないけど、たまにある不安を感じるコトがあるの。

“アタシ、人間なんだろうか”

“日本人なんだろうか”

って…。

間違い無く人間なんだろうけどさ。

髪も目も黒いし、名前だって漢字だからから日本人だろうけど。

何せ大事なコト、憶えてないモンで…。

名字も家族のコトも住んでた場所のコトも。

でも、神崎家の娘でいるコトに、何一つ不満も不安も無いよ。

むしろこんな正体不明なアタシを引き取ってくれて、愛情満タんに育ててくれるから感謝しか無いし。

だから、あまり深く考えるコトはしないようにしてるけどね。

そろそろベッドに入るか。

辺り一面真っ白。

壁も天井もない、ただホントに辺り一面真っ白な世界にアタシはいた。

足元も真っ白。

前方にうつすら見える赤茶けた建物が、何か懐かしさを思わせる。

コレは、、夢？

!!!!!!!!??????

石が光ってる!!

しかも黄色？金色???

どうなっちゃってんの？コレ・・・。

何かを示してんのかなあ。

さっきの白っぽい光も何かを示してるのかも…。

アタシは建物の方に向かって歩き出した。

ゆっくり、一步一步踏みしめて。

何だか良く分からないけどあの赤茶の建物、やっぱり懐かしく思え

る。

でも、、思い出せないなあ…。

建物は、歩いてても歩いてても近付いて来ない。

真っ白な世界も、いつまでも続く。

どこまで歩けば近付けるんだろう…。

何で近付かないんだろう…。

石はずっと光ったままで。

どのくらい歩いただろう。

周りに何も無いからどのくらい歩いたか分かんないけど、感覚としてはもうかなり歩いた感じがする。

建物は、やっぱり遠いままで。

どこだろう、ココ…。

えっ？あれっ？？？クラクラする…。

倒れそう。

目の前にはいつもと同じ風景があった。

自分の部屋だ。

やっぱり夢だったってコトなの？

石は光ってない、いつもと同じ状態に戻ってる。。

ワケ分かんないよ!?

壁の時計に目をやると、まだ3時…。

もう一眠りしようっと。

その後はぐっすり眠れたモノの、目覚めてからアタシのアタマの中は昨夜の夢の、あの建物のコトでアタマがいつぱいだった。

気を抜くとすぐぼんやり考え込んで、フツと思い出したように我にかえってをただひたすら繰り返して。

どうやつても思い出せないんだけどね…。

【妃杏…。】

ひゃっ!?!?!?

石が一瞬光ったよ?

しかも今呼ばれた????

授業中、先生の説明の真っ最中だったのに、動揺のあまりガツンと勢い良く席を立ち上がった！！

ざわめく教室内。

『すいません！』

恥ずかしくって、真っ赤な顔で叫んでその場に座り込む。

恥ずかしいiiiiiiii!!

石はすっかり元の状態に戻っていた。。

「神崎さん、大丈夫？」

先生が怪訝そうな顔。

恥ずかしさのあまり顔を上げずに、手を挙げて返事した。

まさに、“穴があつたら入りたい。”状態。

無くても、自力で掘ってでも入りたいよ!!!!!!!!!!!!!!

何なの？昨日から!!!!!!

今まで何も無かったのに!!

やっぱり何かを示してるの？

だとしたら何？

それとも“プラスチック”なんて言った罰?????

だったらごめんなさい!!!!冗談です!!!!謝ります!!!!もう言
いませんからあ!!!!

心の中で泣き言言いながら懇願。

多分そんなんじゃないとは思っけど。

何だかそんな気がするんだな。。

勘でしか無いけどね。

それにしても、さっきの光の影響で夢のコトはすっかりどこかに消
え失せちゃったワ…。

あんな恥ずかしい思いそうそう無いからねっ。

今は、“また光ったらどうしよう”って不安と、“次光つても動揺
しないぞっ!”て気合が半々。

ペンダントを手のひらに乗せてぼんやり眺める。

「妃杏？」

璃音が机の下からアタシの顔を覗き込んできた。

『ビックリするじゃない!』

突然視界にぬうつと顔が現れたらそりゃ驚くつちゅくの!!

心臓に悪いワ!。

「妃杏、今日ヘンだよ?大丈夫??」

『えっ?』

「授業中いきなり立ち上がるし今だってぼんやり手のひら眺めてるし…。何かあった?もしかすると恋?」

眉を下げ気味で心配してくれてたかと思ったら何を言い出すんだよこのコは…。

メチャクチャ嬉々とした顔してるし。

まあ確かに、璃音からすりゃ“手のひら眺めてる”ようにしか見えないんだよね。。。

“何かあった?”はあながち間違いじゃないけどね。

『ん〜ん、大丈夫。恋は無い!』

きっぱり。

“恋多きオンナ”璃音は、いつも誰かに恋をしている。

アタシと言えば、ココ最近（高校に入ってから）は全然無い。

“男友達”はそこそこいるんだけど。

何かね、“恋愛感情”に発展しないんだ…。

“一緒にいて楽しい”止まりで。

何だろ、“ときめく”コトはあるんだけど。

ちがうよ!？

男性恐怖症じゃないよ！

“カッコいい”って思う人は出てくるよ。

芸能人でも周りの人でも。

でも、そこ止まり。

良くは分からないけど、“楽しけりゃそれでイイや”的な考えがあるみたい。

璃音から言わせればアタシは重度のオクテらしいけどね。

自分ではそう思っていないから。

気にしない気にしない！

「じゃね、妃杏！」

部活の妃杏とはいつも教室でバイバイ。
バスケ

アタシは今日は生徒会。

僭越ながら、副会長なのです。

「神崎いゝ。」

隣の4組の相野クンが呼びに来た。

2年生役員チーム（アタシと男子2人）で一緒に生徒会室に行くのが通例。

2人で1組の須宮クンを呼んで生徒会室へgo！

【妃杏…。】

ぬつつつつつ！！！！！！

まただ！！

すかさずペンダントに目をやる。

…光ってる。

その場にビタつつつつつと立ち止まり、直立で胸元のペンダントを直視。

「神崎？」

気付いた須宮クンが、数メートル先で立ち止まって呼んでくれる。

慌てて2人の元に走る。

『ごめん！』

ひきつり笑いでごまかす。

ふうふうふう．．．．．

大きく溜め息。

心臓、バクバクしてるワ。

ハンパ無く心臓に悪いよ。

今日2回目だよ。

何だっतेの？一体…。

さっきのアタシを呼ぶ声も、授業中に聞こえた声も、何か、“サー”てノイズみたいな音の中で聞こえたの。

授業中にしてもさっきの廊下にしてもノイズなんておかしいよね。

授業中はパパくらいの男性の声。

さっきのはママくらいの女性の声。

でも、パパの声でもママの声でも無かった。

聞いたコトの無い声。

さすがに今度はばかりは動揺が治まらないワ。

何時間経つてもずうっとバクバクしている。

視線は自然とチラチラペンダントに移る。

ん？

んん？？

今、不意にある光景が脳裏を過った。

白のレースのカーテンが、大きな窓から入る風に揺られている。

壁は薄ピンクでピアノがあって…。

これまた懐かしい感じがする。

でもやっぱり思い出せない…。

何だろう…。

駅からの1人の帰り道――

みんなと話しながら帰って来てたから“謎の声”のコトなんて忘れて音楽を聴きながら帰宅中。

【妃杏…。】

ひゃあああああ！！！！！

まただよ！！！？？

しかもヘッドホンで音楽聴いてるのに！！

今回もノイズ付き！

うゝ あつつつつつ！！！！！！

石が光ってる！！！！！！

黒？

ク口おおおおお？？？？？

ク口おおおおおおお？？？？？？？？？？？

黒って、勝手だけど良くない気がしてきて胸騒ぎがして、小走り気味に家に急いだ。

今回は前とは違う男性の声だった。

ん！！！！！！！

んん！！！！！！！！

また脳裏にある光景が浮かんできた。

今度は人の辺り一面の色とりどりの花畑。

空は真っ青で。

やっぱり懐かしく、温かい感じがした。

何なの今日は！！！！！！！！

気が全く休まらないよ。

せっかくみんなとお喋りして気が紛れたってのにまた心臓がバクバクしてるしい！！

またぼんやりしてふと我に帰っての繰り返し。

視線はチラチラペンダントに。

「妃杏？」

食事中にもぼんやりしちゃってた。

ママに声を掛けられる。

テーブルの一点を見つめていつまでも口を動かしていた。

口の中には何も入ってないのに。

ダメだ、精神的に良くないワ。。

入浴中は入浴中で、バスタブの中でペンダントを見入ってしまったのぼせる寸前まで考え込んでしまった。

危ない危ない…。

でも、こんな時でもこの石は、やっぱりアタシの味方だった。

どんな精神状態でも、この石を見ていると次第に気持ち落ち着いてくるの。

スーッとモヤモヤが消えていくような気がするから。

落ち着いて来たら眠くなって来ちゃった！。

今日は1日精神的に忙しかったからな。

今日はもう寝るか。

コレ、昨夜の夢と同じじゃない？

何なの？

あつつつ！ペンダント！！！！

視線を下に向けると石は不思議な色に光っていた。

赤？黄？緑？青？白？紫？ピンク？オレンジ？

代わる代わる、色んな色に光ってる。

何コレ……

でも、あまりのキレイさに見とれちゃうな。

「妃杏様！？」

はい？

妃杏“さま”？

誰？それ……。

アタシ以外に誰か居るの？

、、、、見渡す限り、居ないよねえ。

ノイズ無しに、クリアに聞こえたと思ったら、“様”って。

アタシじゃないコトは確かだな。

「妃杏様!!」

うゝあゝあゝあゝあゝ!!!!!!!!

驚きすぎて表情が固まっちゃった。

目の前に突如として男性が現れたんだもん!!!!!!!!!!!!!!!!!!

心臓が焼けるように熱い。

瞬間的に舌痺れるし。

って、誰?

「妃杏様? ですよね?」

爽やかイケメンのこの男性、溢れそうなくらいのとびきりの笑顔で話し掛けてきている。

やっと表情が動かせられるようになったアタシはこの男性に反するかつてくらい全力のひきつり顔。

『名前は合ってるけど、アタシ、様呼ばわりされる様なキャラじゃないですけど...。』

アタシのコトバが耳に入っているのかいないのか、男性はいきなりその場に跪いた。

何？

映画とかでは見たコトあるよ？こーゆーの…。

家来が王様の前に現れた時とか、男性が女性にダンスのお相手申込む時とか。

ソレをなぜアタシに？

「インペリアルゲートから妃杏様をお迎えに上がりました、ワタクシ如月と申します。長い期間お待たせしまして誠に申し訳ありませんでした。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

んんん？？？

アタマの中、点々で埋め尽くされてる。

何言ってるの？この人…。

あつつつつ！ちよつと待って？

この男性、良く見ると、イケメンなだけじゃなく、かなりのルックス。

はつつつ！！！

もしかして？？？？？

『どこかのお店のホストさん?』

閃いたアタシは何のためらいもなく尋ねた。

“如月” って名前もホストっぽいし。

そしたら…

「はい???」

って逆にヘン顔されちゃって、しかも

「何ですか?ホストって」

って、時代錯誤極まりない質問してきた。

アタシの顔が更に歪む。

ホストを知らないのはさておき、格好がホストっぽくないか。

白のエナメルっぽいツナギみたいな格好。

「憶えておられないのですか?」

悲しそうな顔してる…。

「予想されていたとは言え、最悪の展開だ。」

何やら1人でブツブツ言ってる。

「その胸元のペンダントが動かぬ証拠です。」

『えつつつつっ！！！！！！』

思わず声を張り上げて驚いた。

『ペンダントが見えるの？』

アタシのすつとんきょうな声に如月サンは口を開けてぼかんとしている。

『だって、ペンダントが見えたの、如月サンが初めてだから！』

“コレでもか！” ってくらい、両目を見開いて驚きを表す。

「：そうでしたか。おそらくそのプラチナムストーンがこの惑星のモノでは無いからかも知れませんね。」

何トンもの強い衝撃を感じた。

“「この惑星のモノでは無い」”

って……………

アタシ、やっぱり人間じゃないの？

……………、

あゝ、れえ？

アタシはこの男性の着ているツナギみたいな服の胸元を見て固まった。

あの刺繍されてるエンブレム、、

『そのエンブレム。』

エンブレムから目を離せないままアタシは言い出す。

すかさず男性が切り返してきた。

「思い出されましたか？」

メチャクチャ目を輝かせてる。

思い出したも何も・・・

『全く同じエンブレムの刺繍の入ったワンピース、コドモの頃に着てたから…』

今でも部屋のクローゼットにしまっただけあるよ。。

「このエンブレムは王室のエンブレムです。」

王室ううううう？？？？？

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

今またアタマに景色が浮かんだ。

如月サンと同じ服を着た人がたくさん縦一例にずらあゝつと並んでいる光景。

呆然としてしまう。

でも…

『王室って？アタシ、日本人じゃないの？髪の毛も目も黒いの？』

何やら背中を向けていた如月サンは、あたふたしながらも平静を装い淡々と説明してくれた。

このペンダントの石はプラチナムストーンって言って、“エターナルプラネット（琉冠星）”って惑星に存在する天然石らしい。

琉冠星は今から約1000年先に発見される、地球と全く同じ環境の惑星らしい。

アタシはその王女らしい。

『ってコトは、アタシは未来の人間なの？』

理解したようで、理解出来てない。

「はい。」

“はい。”って、何てコトなくシレッと答えた。

1つ溜め息。

ワケ分かんないよ。

『何で？何か言ってるコトメチャクチャじゃない？』

アタシ、キレ気味。

エンプレムのコトもペンダントのコトも、この2つに関しては信じて良さそうだけど…。

「先日、ストーンが光りませんでしたか？」

ドキ――――ん！！

小さく頷いた後、光った例全て話した。

「その満月の夜に光った際、時空の歪みが出来て、その歪みから妃杏様のストーンのパワーを我々がキャッチしました。」

はぁ……。

「ノイズと共に聞こえた声は、恐らく皇王様と王妃様つまり妃杏様のお父様お母様の想いが時空の歪みを越えてストーンに反応して聞こえたモノでは無いでしょうか。黒と言う色が気にはなりますが、聞こえた声は恐らく妃杏様のお兄様かと。」

今の話でフツと何かが降りてきた。

お父様・お母様・お兄様の顔が一瞬の閃光と共に浮かんだ。

と、同時に耳に焼き付いてるあのコトバ――

“困っている人を助けるのがあなたの役目”

“この石は命と同じくらいに大事”

の声とあの時間こえた声がシンクロした。

ちよつと胸が熱くなって涙が出てきちゃう。

お父様……お母様……お兄様……。

でも、不思議だな。

今までこの約10年、一度も思い出したコト無かったのに。

きっかけてわかんないな…。

「妃杏様は、230年後の未来の琉冠星の王位後継者様であらせられます。」

[illegible]

目が飛び出そうな程の驚愕の発言だった。

驚きのあまり声が出なかった。

王位後継者つて。。。

「そのプラチナムストーンが王位後継者様の証にございます。」

如月サンの目線はアタシのペンダントに向いていた。

アタシもつられてペンダントを見る。

『王位後継者って、アタシオンナなのに！？しかもお兄様がいるのに？』

思いつきり声が裏返った。

「このプラチナムストーンは男女関係無く、誰彼構わず反応するワケではありません。」

“この石は命と同じくらいに大事”

って、そう言う意味だったの？

呆然として、ただ立ち尽くしていた。

「本来であればこのような形ではなくちゃんと妃杏様をお迎えに伺うべきなのですが、何かしらの妨害があるようで、やむを得ず妃杏様に身体的苦痛を伴わせてしまうのを覚悟で妃杏様の脳波にイントールドさせて頂きました。申し訳ありませんでした！！。」

勢い良く土下座した。

アタシは自分で全身の血がアタマに駆け巡るのが分かった。

あの激痛！！！！！！

アタシはたまらず叫んでいた。

『やむを得ずじゃないよ！！！！マジ死ぬかと思ったのよ？』

「申し訳ありません！！」

土下座のまま如月サンも叫ぶ。

あの痛み思い出して、心拍数が急上昇してきた。

「コレを着けていて下さい。コレがあれば妨害を防げますので次からは直接妃杏様をお迎えにあがれます。ワタクシので大変恐縮ですが応急処置と言うコトで何卒御容赦下さい。次にお会いする時は妃杏様用のお持ち致しますので。」

そう言つて如月サンは自分のしていたブレスレットを外しアタシに着けた。

プラチナ？シルバー？

銀色の鎖っぽいブレスレット。

継ぎ目に緑の石がある。

「そのブレスレットも恐らく普通の方には見えないと思いますのでご安心を。ソレがもし激しく点滅するような事があつたら危険を示す証拠ですので、石を強く握り締めてワタクシを心の中でお呼び下さい。ストーンが反応してエネルギーを発してくれるハズです。そのエネルギーをキャッチして来ますから。」

はあ。。。。。。。。

真実

寝れなかった。

あれからと言うモノ、一睡も出来なかった。

寝れないから、クローゼットの中からワンピースを取り出して見た。
やっぱり同じエンブレムだった。

大きな溜め息が出ちゃったよ。

信じてしまう部分と、信用出来ない部分が入り乱れてて。

ただひたすら呆然としていた。

階段を下りながらボッッ。

喉が渴いてキッチンに下りてもボッッ。

冷蔵庫を開けてもボッッ。

グラスに烏龍茶を入れた後もボッッ。

今日、バイト大丈夫？こんなんで…。

行かなきゃイケナイけど。

アタシは2世紀未来の王女で、しかも王位後継者…。

だから“困っている人を助けるのがあなたの役目”って教わって来たの??

だからアタシは孤児だったの?

このペンダントが王位後継者の証…。

“このペンダントは命と同じくらい大事”って言われてたのはその為だったってコトなの?

言われれば納得出来るコトだワ…。

つじつまも、合うっちゃあ合う。

ペンダントが周りの人に見えないのはこの惑星に存在しない石だから…。

じゃあアタシはどうしてココにいるの?

2世紀も先、しかも地球じゃない惑星の人間がどうやってココに来たの????

ソコが謎だワ。

如月サンは、時空の歪みが原因だって言ってたけどさ、どうしてアタシ1人?

迷い込んだ?

・・・・・・・・・・・・・・・・分かんない！！！！！！

思い出せない。

どーゆーコト？？

教えて！？

ペンダントに心の中で問い掛けた。

、、、、無反応。

そりゃそうだよね。

イマイチ把握出来ないよ。

どーしたらイイのか分かんないし。

何があだか分かってないのにどーしたらイイかなんて、分かるワケ無い。

気が付くと、外は少しずつ夜が明けて来ていた。

眠れそうにないし、このまま部屋にいてもどうしようもないからアタマすっきりさせる為に散歩でもしてくるか。

見慣れた景色。

もう10年チョイ歩いてきた道。

いろんなコト、浮かんでくるな。

パパママと手を繋いで歩いたり、

もちろん通学路だし。

間違い無くアタシが通ってる道だ！。

もし仮にアタシがホントに未来の人間だったとしたって、アタシは今ココにいる。

誰が何と言おうとこの街で10年チョイ生きてきたその事実が真実だ。

ソレでいいじゃない。

そうだよ！

そう！

3才の時からココにいるんだから！！。

アタシはふと足を止めて昇る朝日を見た。

そしたらモヤモヤが一気にキレイさっぱり吹き飛んでくれた。

アタシはアタシ。

今は神崎妃杏。

ソレでイイ。

ヨシ！スッキリしたところで、家に帰ってバイトまで一眠りするか
！！

『行つてきまゝす！』

スッキリ気分でバイトに向かう。

良かった、回復して。

あんなんじゃない仕事どころじゃ無いモンねっ。

何だか今朝はヤケにパパにもママにも甘えたくなくて、家に出るま
でずっと一緒にいちゃった！。

ママは嬉し恥ずかしって様子だったけど。

何か、あんなコトの後だから余計にそうしたくなっちゃったんだ
よね…。

ヨシ！今日も頑張るぞっ！！と。

店が見えてきて気合いを入れたその瞬間、ペンダントが突然、急に

激しく点滅し出した。

ハツとして、心臓が焼ける様に熱くなって、心拍数も速くなってきて、アタシはたまらず引き返した。

早足で。

如月サンに言われたコト思い出して、言われた通りにしてみる。

コレで何にも起きなかったら如月サンの言ってるコトはウソってコトだもんね！

アタシ、こんな時の方が冷静??

“石の部分を強く握り締めてワタクシの名前を何度も何度も心の中で呼んで下さい。”

その通りにしてみる。

“点滅の時は危険を示す証拠”

如月サンそう言ってた。

だから何度も何度も心の中で如月サンの名前を呼ぶ。

今アタシモーレッツに心臓がバクバクしてる。

如月サン！如月サン！！助けて！！！！

来なきゃ信じないよ！！！！

えつつつつ？？？？

ペンダントから眩い光が天に向かってまっすぐ、一直線に放たれた。

コレが如月サンが言ってた“エネルギー”？？

天まで光が届くとさらに強い眩い光が折り返すかの様にアタシに向かってきた。

ペンダントに向かってきた光はペンダントに反射して白いドーム状のバリアの様なモノに変わった。

何…、コレ。

バリアに看取れていると声がした。

「妃杏様？」

『如月サン？、、じゃあ、無い…？』

声がしたから上を見上げてた視線を下に下ろすといつの間にか現れていたのは、格好は同じだったけど、如月サンより背が高くてスラッとしている男性だった。

「ワタクシ如月の上司の神楽と申します。」

この人もまた、跪いてる。

ん？

あれ？？

『もしかしてこの光、アタシ達以外には見えてない？』

アタシ、気付いちゃった。

アタシからは道行く人が見えてるのに、道行く人、こんな目立つハズの光に誰一人見向きもしない。

「はい、その通りでございます。」

顔を上げないまま答えた。

来たのは如月サンじゃ無いモノの、如月サンの言ってるコトはホントだった！！！！

何だか複雑な気分だワ…。

しかし、神楽サンもまたホストチックな名前ネ…。

ペンダントの点滅に気付いた神楽サンは、物凄い剣幕で

「すぐ戻ります、このままでお待ち下さい。」

って言うから、アタシ、無意識のうちに神楽サンの腕を掴んでしまっていた。

自分が一番驚いた。

でも離せなかった。

「ご安心下さい、大丈夫ですから。」

なんて優しい笑顔なんだろう。

神がかり的な安心感。

そのまま呆然としちゃった…。

ウソみたいに神楽サンは一瞬にしてスッと消えてしまった。

何？今の…。

“瞬間移動”？

アタシの前に現れた時も、一瞬のウチに現れたモンな…。

何がどーなってただ？？？？？

少し整理しよう…。

んつと、バイトに、、

あゝつつつつつ…！！…！！バイト…！！…！！

今頃思い出す。

ヤバイ！出勤時間過ぎてるじゃん！！遅刻だあああ。

慌ててカバンからケータイを取り出した。

電話帳から店のデータを探す。

．．．．、無い．．．。

一時パニック。

あれ??????

何で？

じゃチーフに　　、無い!？

更にパニック!!

それだけじゃなかった。

副店長・店長・バイト仲間のデータがキレイさっぱり消えていた。

何が何だか理解不能。

ただ立ち尽くすしか出来なかった。

「妃杏様？」

神楽サンの声で引き戻された。

アタシ、神楽サンの声聞いたら途端に涙が出てきちゃって…。

声も優しいからつい…。

「妃杏様」

泣きじゃくるアタシを神楽サンは、そつと優しく包んでくれた。

アタシもアタシで抵抗しなかった。

と言うより出来なかった。

どうしようも無くて。

「座りましょう。」

神楽サンの声は優しいだけじゃなく、心にスツと入って来る。

何だか安心出来る。

「どうぞ。」

ゆっくりベンチに腰掛けると神楽サンが何やら缶の様なモノを差し出して来た。

見たコト無いよ、コレ。

得体の知れない物体に戸惑いながらもアタシは手にしてみた。

え、つつつつつ??????

今触れたら飲み口が開いたよ?

物珍しさに、じろじろ見回したり何度も触れたり離したりしちゃう。

「SMTと申します。この時代で言うところのスポーツ飲料と栄養ドリンクのようなモノです。」

ほお…。

得体の知れなさが倍増したところ毒見を。。

!!!!!!!!!!!!!!美味しいいいいい。

表情が和らいだ。

『ステキなお顔されますね。』

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

思わず吹き出しちゃったじゃない。

ナニ齒の浮くようなコトいけしゃあしゃあと云っちゃってくれちゃってんの？

「大丈夫ですか？」

慌ててアタシの肩に手を掛けた。

『んなコト男の人に言われたコト無いから…。。』

少し咳き込む。

「申し訳ありません。」

深々と謝られる。

『やめて下さい!』

今度はアタシがあたふた。

「先程の点滅はレジスタニアと申します反国家組織のメンバーが近づいていた為に反応した様でして、直ちに逮捕しまして琉冠星にタイムワープさせて参りましたのでご安心下さい。」

レジスタニア?

反国家組織???

良く分かんない。

けど、バイトのみんなのデータが消えたコト、聞いてみた。

神楽サンはすかさず答えてくれた。

「レジスタニアは妃杏様に接触するために、あるパワーを使ってあの店に潜入しました。」

『あるパワー?』

分からないコトはすぐに聞くべし!!

「フオールアップと申しまして、一時的に歴史を差し替えるコトです。」

歴史・・・。

現在なのに歴史・・・。

「フオールアップは異空間移動の際に強制解除されます。その影響で妃杏様があちらの店でバイトされていた事実が一緒に消えてしまったのかと。」

そんなあ。。。。

ヤバッ！！また泣けてきた。

1年ちよいあの店でバイトしてきて、週2〜3日ではあったケドみんなという思い出あったから…。

その思い出が次々に浮かんで来ちゃって。

『ごめんなさい。』

そうは言っても泣いてしまう。

「ワタクシが妃杏様をお護り致します。」

ドキッとしちゃった。

強い眼差しに。

顔、赤くなつてない????

何でこの人はこうも言われ慣れていないコトバをさらりと言つてのけるの？

言われたこつちが恥ずかしいワ。

『ホントにアタシがその王女なんですか？何かの間違いじゃ…。』

自分でも悪あがきなのは分かつてた。

如月サンの言つてたコトはホントだったし、思い当たるコトだつていくつかあるのに。

でも、聞かずにはいられなかった。

「まずはそのペンダント、この時代の方々には見えてませんよね？ソレはその石がこの時代のモノでは無いからです。」

如月サンと同じコト言ってるね。

如月サンが着けてくれたブレスレットも、今アタシ達を包んでいるこのドームの様なモノも、この時代には無いモノだからこの時代の人達にはアタシ以外見えないらしい。

現在なのに歴史とか、この時代に確かに存在するのにこの時代の人には見えないモノを持っている…。。

胸がよじれそうな程苦しくて痛い。。。

でも、ペンダントから天に向かって光が放たれたりするくらいだしね。

やっぱりアタシはフツーじゃない？

無駄な抵抗か・・・。

『じゃあアタシはどうしてココにいるの？』

いくら考えても腑に落ちなかったコト。

「妃杏様の3歳のお誕生日の日・・・」

3歳の誕生日??

そう言えば、ひだまり園で誕生日を聞かれて答えた時、“「昨日? ...」” って驚かれたっけ。

「お疲れになってSPとお部屋に戻られたのを最後だったそうです。」

部屋でSP・・・。

前に脳裏に浮かんできた風景がまた浮かんできた。と、次の瞬間だった。

突然、猛烈な全身の激しい震えに襲われた。

あの時のコトが、フラッシュバックのように甦って来た。

『部屋でピアノを弾いていたら突然窓が割れて、武装した人達が入ってきました。』

震えと共に涙も出てきた。

「妃杏様??」

神楽サンの声がひきつっている。

強くアタシを抱き締めて。

アタシは怒涛の記憶のフラッシュバックに耐えられない。

喋らずにはいられない。

『部屋にいたSPがアタシを連れて逃げてくれました。でも、逃げるウチに次から次へと消えていなくなって。気が付いたら1人で無我夢中で走ってて…。』

またしてもこの10年一度も思い出さなかったコトが、たった一言で怒涛の如く思い出して。

「消えた? 妃杏様の目の前ですか?」

アタシは小さく頷く。

話し終わった後も、しばらく震えと涙が止まらなかった。

落ち着かせる為に残っていたSMTをイッキに飲み干した。

少し、気が落ち着いた。

バイトに出掛けたのは昼前だったのに、外は日が沈み初めていた。

ココまでの疑問を全てぶつけてくうちに、いつの間にかすっかり落ち着き、涙もひいていた。

話を聞けば聞く程にアタシが“この時代の人間じゃない現実”が次々に明らかになっていくのだが…。

中でも一番現実味を帯びたのが、“なぜアタシはレジスタニアに狙われているのか”だった。

“「ヤツらの目的は妃杏様ではなくストーンに違いありません。」”

って。

“「むやみやたらにストーンにふれるとストーンの怒りに触れます。過去に何度かレジスタニアがストーンの無効力化を試みましたが、その度に当事者のレジスタニアは宇宙の彼方に追放されておりますので恐らく妃杏様に近付いたあと何らかの形でストーンを奪い取るうとしているに違いありません。」”

アタシは全身に凄まじいスピードで鳥肌が立った。

『アタシ、殺されるの?』

「それは無いと思いますが、ワタクシが責任持ってお護り致します。」

まっすぐアタシの目を見て言ってくれた。

それが神楽の仕事だって分かっている、心の中は激しくドキドキしていた。

「お家に帰りますか？」

神楽サンが立ち上がった。

『神楽サンも？』

神楽サンの顔を見上げる。

「妃杏様、先程から申し上げるタイミングを逃しておりましたが…、

」

ん？

首を傾げる。

「敬語はおやめ下さい。」

前に倒れ込みそうなくらい拍子抜けした。

正直、「そんなコト？」って。

「ワタクシはこのドームに入ったままで離れたところから妃杏様をお護り致しますのでご安心下さい。ワタクシがこの中にいる時は妃杏様がワタクシと話していても周りには話してないように見えます

ので。」

そう言われ、渋々見えない神楽…を連れて帰宅した。

『ただいまあ!。』

心の中は、そこまでテンション高くないけど、挨拶くらいは元気良
く!!

ん?

玄関には見慣れない男物のブーツがある。

お客様?

ん????神楽と同じブーツだ。

……まさか!?!?!?

思い切り顔を歪ませた神楽と目を合わせる。

つられてアタシもヒドイ顔になる。

「お帰り神楽、妃杏!!如月先に帰ってきてるよ。」

やっぱり…。

ママが顔を出して叫んでる。

神楽が肩を落として愕然としている。

頭に手を当ててすっかり頂垂れて。

神楽は見えてないんじゃないのかよ!!!

「お帰りなさい!」

あっけらかんとした如月が玄関に出てきた。

「如月いい。」

神楽の凄みのある低い声に尋常じゃない気迫を感じずにはいられなかった。

強い力で如月の腕を掴み神楽は玄関を開けた。

『アタシの部屋で話そ!』

その場を収めようとするアタシ。

ひとまず3人でアタシの部屋に行った。

「なぜキサマが勝手に神崎家にいるんだ?なぜ勝手にフォルアッブしてんだ?誰に断った!」

神楽の凄まじさに、如月たじたじ。

見てるアタシが痛かった。

時代は変わっても上司と部下の関係は変わらないんだね。

厳しい上司に暴走部下ってトコ？

アタシは雑誌を読んで聞いてないフリ。

しっかり聞いてるけどね。

“フォールアップ”ってコトバに反応して、昼間のコト思い出してグズったり。

「我々が妃杏様の兄ってコトにしました。」

上目遣いでチラチラと神楽の表情を伺っている如月。

横から見れば一目瞭然だ。

「我々が妃杏様の兄だと？なら我々は妃杏様に対して不相応な言葉を使わなければならないのか？しかも常に直接妃杏様に付いていなければならいんだぞ？妃杏様に多大なご迷惑をお掛けしてしまうんだぞ？ベースバックは免れんな。」

ベースバック??

良くないコトなのは如月の姿を見れば分かるな。

さっきの神楽並に肩が落ちてるモン。

「妃杏様…。」

言いづらそうな神楽。

「フオールアップは修正出来ません。我々以外の方達の前では便宜上不相応な言葉遣いになるコトを御許し下さい。また、本来であれば離れたトコロから周囲に見えないような形で妃杏様をお護りするハズでしたのを直接、しかも2人も常に側に付かせて頂くコトをご容赦下さい。処分はきっちり致しますから。」

如月の憔悴しきった顔に、アタシは素直に“「うん」”と言えなかった。

『処分て？』

アタシまで上目遣い。

「如月はまだ研修生です。見習い生は研修期間中にペナルティを2つ出してしまうと、即“アカデミア”と申します養成施設に戻ってやり直ししなければなりません。」

・・・はあ。

ただ頷く。

「今回如月は報告ミスを2つもしてしまい、挙げ句の果てには妃杏様に多大なご迷惑をお掛けしてしまうと言う、前代未聞なコトをやらかしてしまいました。恐らく如月はベースバック確定です。」

うわっつつつつ！！！！！！

如月の顔、見るに耐えないワ…。

しかも立体で。

またしても跪いてる。

コレ、3D以上だよねえ…。

4D?5D????

ハイビジョンよりも映像キレイだし。

はあああああ。

恐るべし、技術進歩…。

「妃杏様、初めまして。」

しゃ…、喋ったああああ!!!。

心臓、尋常じゃないくらいバクバクしてる。

苦しささえ感じる。

今のアタシの心拍数、計測不能なんじゃないだろうか…。

「ロイヤルゲートの最高責任者を仰せっております、朱雀と申します。この度は如月が多大なご迷惑をお掛けしておりますコト、謝罪のコトバもございません。」

bossが朱雀…。

ホントにホストっばい…。

結局アタシの恩赦（？）が無ければ如月はベースバック確定だった
と言うコトで、ベースバックは免れたモノの、執行猶予付で半年だ
った研修期間を1年延長ってコトでカタがついた。

かくして数時間にして3人家族からイッキに5人家族のアタシにと
ってはハチャメチャな生活が始まった。

運命

「寛大なお心遣い、誠にありがとうございます。誠心誠意、妃杏様にお仕えさせて頂きます。」

如月が土下座してきた。

『そんな大袈裟な…。』

ひきつるアタシに、神楽はボソツと言った。

「また1人、妃杏様に忠義を尽くす者が増えちゃいましたね。」

神楽、含み笑い。

ん？

首を傾げるアタシに、意味深な笑いでごまかされたみたいだ。

ナニ???? “また1人” って。。。

“フォールアップ”、実に恐るべき。

夕飯の時5人で食卓を囲んだけど、パパママ、フツーに神楽や如月と接してて。

まるでホントに初めからこの5人で生活しているみたいで。

アタシだけ1人、馴染めずにポツーンと取り残されてる気がする…。

ついていけないヨ。。。

食後は3人で後片付け。

『ずいぶんと手際イイんだね。』

テキパキこなす2人をアタシは感心気味で見ている。

アタシの勝手な予想でいくと、この人達の時代くらいになると何でもオートマチックなんじゃないかって思っちゃうから。

「アカデミアでやらされますから。」

苦笑いして如月が教えてくれた。

こんなコトもやるんだ…。

ちよつと衝撃的。

あれ？何だかイイ香り。

いつの間にか神楽がコーヒーを淹れていた。

すんごいイイ香り…。

「マグカップは合ってますか？」

ちゃんとそれぞれのマグカップに入れてくれる。

見れば色とかで何と無く分かるかな？

それにしても、、

『すごいイイ香りなんだけど…』

興味津々で神楽の隣に行く。

「これですよ。」

いつも使っている、その棚にあるドリップコーヒーだった。

アタシは目を丸くさせた。

『ホントに!?!』

いつもと全く同じコーヒーなのに、いつもと全く違う香り。

すごい上品な香りで、コーヒーショップみたいな香りがする。

『こんなコトもやるの?..』

如月に耳打ち。

「コレはチーフの特技です。センターでも凄い評判です。」

へえええええ。

感心し過ぎて呆気に取られる。

部屋に戻ると神楽も如月も入ってきた。

・・・・・・はあああ。

コレがずっと続くの？

もう一度溜め息。

とりあえず、いつも通りベッドに腰を下ろす。

立ったままの2人。

「妃杏様、ちょっと失礼しますね。」

えっ？

如月がアタシの手首にあったブレスレットを外した。

そう言えばそうだったね、コレ、如月のだったね…。

『ありがとう。お陰で助かったよ。』

「恐縮です。」

何か如月、ちょっとおとなしくなった？

そんなに効いてるの？

神楽に箱を差し出された。

これもまたSMTみたいに、開け口も継ぎ目もフタも見当たらない
…。

まさか、、

「お手を…。」

やっぱりか…。

言われるがまま、箱に手をかざした。

はあああああ…。

手をかざすと、箱の上部が消えて中のブレスレットが現れた。

コトバが出ないよ。

動きも止まっていて、アタシは呆然となった。

「妃杏様？」

神楽の声がアタシを引き戻してくれた。

『ごめんなさい。』

ブレスレットを手にしてさんざん眺めた後、右手首に掛けた。

コレもまた肌が触れるとスツと装着されちゃう手品みたいな作りだった。

如月が外す時も、何だか一瞬でスツと外れたもんね。

技術の進歩イコール手品？

目を見張るモノだらけだ！！

「それから、本来は我々エージェントのみのアイテムなのですが、如月の暴走のせいで妃杏様が御一人になる可能性が御座いますので、皇王様の許可を頂きまして妃杏様仕様を御用意致しました。」

神楽はもう1つ箱を差し出した。

もう驚かないよ？。

むしろ好奇心♪

中には神楽達と同じペンダントが入っていた。

「ポータブルプレイヤー、通常PPです。」

ポータブル“コンピューター”じゃあ、無いんだね。

ポータブル“ミュージック”プレイヤーでも、無いんだね。。。

“本来はエージェントのみが持つアイテム”か。

コレってさつき神楽がbossを出したヤツだよな？

目をキラっキラさせて手に取る。

3ミリ程の厚さに10円玉程の大きさのシルバーのプレート（でも、全く重さを感じない。）にあのエンブレムが刻印してあって、裏にはストーンと同じ石が埋め込まれている。

ちょっとスクエアが入っていて、ジュエリーショップで売ってても何らおかしくないデザインでイッパツで気に入ったよ！。

簡単に使用法を教わった後、ベランダに出てストーンを眺めていた。

皇王様 か。

さっきの神楽のコトバを思い出していた。

お父様．．．．だよな。

顔は出てくるけど、あくまでも10年以上も前の話だしね。

ふと空を見上げた。

ストーンを眺めている時と同じぐらい、空を見上げている時も心が安らぐ。

お母様・お兄様・お祖父様お祖母様みんなの顔が浮かんでくる。

何だか複雑。

1階にはパパママがいるのにね。

「星空、今でも御好きなんですね。」

神楽が隣の部屋の窓からベランダに出てきた。

『今でも?』

「ハイ。皇妃様からお伺い致しております。」

皇妃様　　、お母様か。

「幼い頃から空を見ると泣き止まれたり、何かあると空を御覧になっていたそうです。」

そんな昔っからだったんだね。。。

『ピアノも、今でもなさるんですね。リビングにありましたし御部屋にもキーボードが。』

ピアノも?

そう言えば襲われた日もアタシ、ピアノ弾いてたよね?

2歳そこいらでピアノって・・・。

「妃杏様は大変優秀でいらっしやいまして、1歳で読み書き6カ国語の日常会話をマスターし、2歳でピアノをマスターなされたそうです。」

おいおいおいおい…。

どんだけウルトラスーパーハイパーキッズなんだよ。

「でもその名残が今でもおありなんですね。」

隣の部屋にいたハズの如月がいつの間にかアタシのデスク前にいた。

デスク前に模試の結果を貼ってあって、それを見ていた。

「如月!!」

神楽の鋭い声が如月を一喝する。

『見えるように貼ってある方が悪いのよ。それよりいつの間にかいたのよ。』

ビックリしたわあ…。

「全国5位とかですよ？凄いですよね、さすが妃杏様！賞状もたくさんリビングにありましたし。」

確かにそうだけど、何だか恥ずかしい…。

ちょっと赤面。

確かにひだまり園にいた時からキーボード弾いてて先生達に驚かれてたっけ…。

日常会話は、それ以降あまり専門的な勉強をしてないからあまり進歩してない気がするけど…。

その名残だったのね。。

自分の過去が次々に明るみになってきて、ホントなら嬉しいハズなのに複雑…。

「妃杏様がこんなに御立派になられてて、皇王様方もさぞかしお喜びになられるコトでしょう。」

心臓が飛び出しそうになった。

顔も硬直。

今はそう言う話題、ちと辛い。

お父様やお母様のコトを考えるのが。

逃げてもし方無いし、逃げて済む問題じゃないし…。

でも、まだキツいな。

何せ昨日の今日なんだもん、無理に決まってんじゃない。

アタシ、そんなに強く無いよ。

強くないからなかなか眠れない。。。

眠れないまま時間は過ぎ、現在午前3時過ぎ。

ベランダから見える隣の部屋の如月は、爆睡中…。

今まで使っていなかった隣の部屋は、1日（？いや、数時間か？）にしてれっきとした男子2人の部屋に変わり果ててしまったのだ。

フオールアップ、恐るべしその2・・・。

神楽は、アタシが寝るまで側にいるって、アタシのデスクでPPを操作中。

“寝れそうに無いから休んで”って言ってるんだけど、“ご安心下さい”って言うだけで。

この神楽の“ご安心下さい”って、神がかり的な安心感があるんだよね。

何も言い返せなくなるんだよ…。

1人で家を出ていったハズなのに、帰ってきた時には神楽がいて、家の中には如月がいて、知らないウチに如月と神楽が兄弟になっていて…………。

グレートな1日だったよ。

普通に生きてたらこんなコト、経験できないよ。

ん？この香りは？？…。

振り向くとトレイを持って笑顔で神楽が立っていた。

「いかがですか？」

コーヒーだ。

『コーヒー飲んじやったらますます寝れないじゃない！』
なんて。

逆に、飲んだ方が眠れたりして。

だから言っときながらコーヒーに手を伸ばす。

「ミルク多目にしておきました。」

くううう・・・泣かせる気遣い。

んんん♪やっぱり美味しい！

!!!!!!!!!!!!!!

突然ペンダントが点滅し出した。

イッキに緊張が走る。

「ワタシの手を離さないで下さい！」

強くアタシの手を握って神楽はそう言った。

神楽がPPに手をかざし、昼間の白いドーム状のバリアを出すまでの時間は、瞬きするより速かった。

瞬速？音速？？光速？？？

次の瞬間には、もうベランダにはいなかった。

あの時アタシの前からいなくなった時と同じだ。

何だか、いつも見えている風景が歪んで見えてる。

もしかしてコレが“時空の歪み”？

心臓、ドキドキしている。

超高速で。

ペンダントの点滅が更に激しくなっている。

神楽はPPに手をかざし、蒼白い光の玉のようなモノを出した。

神楽の手のひらで浮かんでいる。

科学の進歩って超能力者も真っ青だよな。

景色の歪みが治まった。

パネルに“サーチアップ”の文字が出ると光の玉は一瞬にして神楽

の手のひらから暗闇の中を閃光のように駆け抜けて行った。

かと思ったら、数メートル先で薄赤の光に色を変え大きくなり、中に人の姿が見えた。

レジスタニア??

光はまっすぐ天に向かって延び、遙か彼方に消えていった。

次の瞬間、眩い光と共に元いたアタシの部屋のベランダへ戻っていた。

この間、実際はきつとたったの数秒間だったんだと思う。

けど、アタシには何時間にも感じた。

長い長い時間だった。

「本来であれば妃杏様をお連れするべきでは無かったのですが、如月を起こしたり、パワードームと申しますあのバリアを出すよりは妃杏様を御一人にするくらいなら恐縮ながらもお連れした方がイイかと思いましたので。申し訳ありませんでした。」

神楽は深々と頭を下げた。

『謝る必要無いよ。』

まだ心臓バクバクしてるけど…。

コーヒーを口にするとコーヒーは全く冷めてなくて、さっきと変わ

らない熱さだった。

やっぱり一瞬の出来事だったんだね。。

マグカップを口に当てたまま、しばらくぼーっとしてしまっていた。

「妃杏様？」

神楽の声がした。

『アタシが戻ればこんなコトは無くなるんだよね？』

視線は変えずに尋ねた。

言いながらも胸が痛む。

ん？

神楽の声がしない。

気になり顔を上げると神楽の顔は気難しい顔になっていた。

「ご自分を責めるのはお止め下さい。レジスタニアを壊滅出来ない我々に責任がありますから。」

反国家組織かぁ・・・。

いつの時代もあるモンなんだね。

「皇王様から“可能な限り、妃杏の意思を尊重しろ”と厳命されております。」

“可能な限り”??? ”

気になるワードが。

そして衝撃の真実が…。

「先日の満月の際に時空間の歪みが出来たコトにより、次の満月がリミットになるでしょう。」

気を失うかと思った。

実際、クラクラした。

次の満月……。

約1カ月。

「ちょうど妃杏様の17歳のお誕生日の翌日にございます。」

アタマに物凄い衝撃を受けた気がした。

“ガン!!!!!!!!!! ”

って、一瞬にして鈍いんだけど鋭くもあり。

“誕生日の翌日”??????????

さすがに今回は立ち直れなかった。

夜が明けても全然眠れず。

日の出をベランダから見ていた。

あのワンピースを手にしたままで。

“ 17歳のお誕生日の翌日 ”

って聞いた直後、アタシはカラダが勝手にクローゼットに向かっていて、ワンピースを出していた。

ワンピースを見つめて、ただ呆然として。

そしたら夜が明けて。

日の出を見ていたら少しは気が晴れてきたから、1階のパパママの部屋に行ってみた。

「ワタクシはリビングで待機致しております。」

って、神楽も一緒に下に降りてきて。

神楽だって寝てないのに・・・。

神楽を心の隅で気に掛けながら、パパママの寝室でアタシは2人の寝顔を見ていた。

さすがにベッドに侵入は驚かせちゃうから側に寄り添って。

涙が止まらなかった。

声を殺して泣き続けた。

今までのコト、色んなコトが浮かんできて。

声に出さないように泣いても、止めどなく出てくる涙には勝てなくて、アタシはそっと部屋を出た。

やっぱり無理だ、声にしないで泣くなんて。

我慢出来ない程の大量の涙が、どうしたって出て来ちゃうから。

そのまま洗面所で顔を何度も何度も洗い流した。

水なんだか涙なんだか分かんないくらいグシャグシャだったけど。

ん？

リビングに行くと、笑顔の神楽がいた。

いつの間にかアタシのマグカップにはミルクが注がれていて。

神楽の笑顔見たら、また涙が出て来たよ。

神楽は子供にするみたいにアタマをぼんぼんと優しく撫でてくれた。

これがまたアタシの涙腺を刺激する。

パパママもこうしてくれたコトあったから。

部屋に戻り、今度はアルバムを全部、テーブルの上に並べた。

神樂が見たいって言うから。

すると神樂はPPに手をかざし、小さいメモリーカードのようなモノと、次にもうちょっと大きめのカードを出した。

2つのカードから緑の光が出て、神樂はその光を写真に当てていく。

まさかとは思うけど、取り込んでる？

啞然としながらも、アタシは写真の説明をした。

さっきさんざん泣いたからなのか、今度は涙の代わりに飛びきりの笑顔しか出なかった。

楽しい思い出ばかりだから。

泣いちゃうかなって覚悟してたけど大丈夫みたい…。
たぶん、このカードのお陰たワ、きっと。。。

今で言う、SDカードとかmicroSDカードみたいな感じなんだろうけど、ハイテク過ぎる…。。

アタシには手品にしか見えないヨ。

「妃杏様は皆様から愛されてるんですね。」

ひやつつつつ！！！！！！

そんな眩しい笑顔でしかも照れちゃうようなコト言わないで！！。

ドキドキしちゃうじゃないのよお！

心臓に悪いワ、神楽のこの笑顔。

気が付くと、もう6時を過ぎていた。

外は完全に明るい。

何だかようやく眠くなってきたぞ？。

大きなアクビが出た。

「お休みになりますか？」

『洗濯してからにする。』

休みの日くらい家事の手伝いしなくちゃね。

「それならばわたくしが…。」

『んなワケ無いでしょー！じゃあお風呂掃除お願いしていい？』

ああ、ビックリして吹き出しちゃったよ！

いくら何でも洗濯はちょっと…。

「かしこまりました。」

・・・って、お風呂掃除出来るの？

出来てる。。。。

アタシはぼーんとお風呂掃除をする神楽を眺めていた。

神楽にバレないように、アクビを連発しながら。

それにしてもお風呂掃除まで出来ちゃうなんて…。

何でもやるの？エージェントって…。

どんなトコなんだよ、一体…。。。

洗濯を終えて、朝食を済ませたらイツキに眠くなってきちゃったよ。

アタシはその後夕方まで爆睡したのだった。

翌朝――

ん？

部屋のドアを開けると下からいい匂いがしてきた。

やばっ!!

いつもならアタシがやるのに!!!!!!

慌てて下に駆け降りる。

キッチンには如月と神楽が立っていた。

『ごめん!』

慌ててエプロンを、、無い!!

ダイニングテーブルの椅子に掛けてあるハズのアタシのエプロンが無かった。

ふと顔を上げると如月がアタシのエプロンをしている。

神楽はママのエプロンしてるし!!

『ちよっと!』

2人の元に駆け寄る。

・・・出来てる。

しょうがないから盛り付けするか。

いくら何でもオナナのアタシが何もしないで男子2人がお弁当準備って…。

って、弁当箱が5つある！

何と出来過ぎな…。

しかし何なの？この未来人達は。

ホントに未来人なの？

アタシの勝手な未来イメージがもろくも音を立てて崩れ去っていくよ。

でも、如月と神楽がいるコトが当たり前な雰囲気違和感を感じてるのはアタシだけなんだよね。

この、現代の科学では説明不可能なコトを普通にしてる辺りは、未来人なんだよね…？

ワケわからんわ。。。

『行つて来まあす！』

「行つて来まつつす！！」

「行つて参ります。」

3人で家を出る。

のはいいんだけど（良くないけど…！）、、、、

『何で同じ制服着てんのよ!』

如月に噛みつく。

家で吼えたかったケド、何かタイミング逃しちゃって言えなかったから、玄関のドアが閉まってすぐさま吼えた。

如月、ウチの学校の男子の制服着てんだモン!!!。

「離れていたら警護も出来ないじゃないですか!？」

如月には全く悪びれている様子が無い。

そりゃ仰る通りですが…。

『だったら何で神楽は私服なの!？』

ドス混じりに。

「チーフは年齢的に高校生は無理です。オレはまだギリで間に合いますから、オレは妃杏様と同級生・チーフは同じ大学の院生と言うコトで。」

『同級生?????』

がつくり肩を落とした。

アタシが養女って事実まで変わってる?もしかして。

むちゃくちゃだよ。

しかもむちゃくちゃはこれに留まらなかった。

「見て見て♪神崎3兄弟だよ!!」

はiiiiiiii???

思わずアゴを突き出してしまふ。

“神崎3兄弟” いいい??

アゴ外れそう。

隣の神楽も愕然としている。

「3人全員恭新学院だなんて、出来すぎだよね。」

道行く人達（ほぼ女子中高生）の、明らかなウチらに対する風評？
評判??が耳に入る度、見えない重い石が肩にのし掛かる。

「執行猶予、取り消しますか？」

上機嫌に見える如月とは正反対の神楽。

かなり怒り心頭そう。

見た目はメチャクチャ穏やかだけど。

鳥肌が立った。

「成績優秀・容姿端麗の院生の長男・神楽に、スポーツ万能の次男・如月、成績超優秀・生徒会副会長の末っ子の妃杏。完璧な兄弟だねえ。」

全身にグサグサ何か鋭いモノが突き刺さってる。

まさに耳が痛い。

気が付くと、アタシも神楽も無数の溜め息をついていた。

少し前に行くご機嫌な如月と璃音。

その後ろを、どす黒いオーラでぐったりしながら歩く神楽とアタシ。

2人とも溜め息連発で。

校門をくぐり、神楽とバイバイ。

「何かあったらすぐ連絡下さいね!」

別れ際、アタシの目をキツと見据えて言った。

アタシはただ笑顔で頷く。

確かに如月じゃイマイチ頼りにならないもんね。。

え、つつつつつ??????

璃音とイチヤイチヤ話しながら如月はウチらの教室に入っていた。

ええええええええええ？？

席が1つ増えてるし！！！！！！

クラスまで同じ？？？

すかさず如月に詰め寄る。

「違うクラスじゃ意味がないじゃないですか！？」

、、、、確かに。

クラスのみんなに何ら違和感無く溶け込んでいる如月に違和感を感じながら、頼杖をついてぼんやり窓の外を眺める。

何だか、言い様の無い疎外感みたいなモノを感じるアタシ。。。

昼休み――

「行くよ、妃杏！！」

はい???

授業が終わるや否や、音が立つかのような勢いで立ち上がった璃音が張り切ってアタシに言ってきた。

『どこに?』

きよんとするアタシに璃音はあきれ気味に答えた。

「何すつとぼけてんの? お昼はいつも神楽サン達とセンターホールで一緒に食べてんじゃん。」

初耳ですが……。

どんどんどん疎外感。

アタシの知ってる、今まで過ごしてきたハズの日常なのに、

アタシ、まるで浦島太郎みたい。

トシは取ってないけどね。

馴染めないアタシがいけないんだろうけど。

こんなにイツキに日常って変わるモノ?

馴染めるハズがないよね。

璃音と如月はやっぱりイチャイチャしていて、センターホール(学院共有のフリースペース)に移動している間も、センターホールで食事してる時もイチャイチャ。

璃音が楽しそうだからイイけど、璃音を取られたみたいでちょっぴ

り嫉妬。

璃音も如月もアタシを気に掛けてくれるから孤独感は無いんだケド。

教室以外は神楽がいるしね！。

今までずっと璃音とばかりつるんだから、ちょっとは刺激があつていいかな。

なんて、アタシってばスーパーポジティブ！！！！！！

・・・・・・そう思わないと持たないワ、マジで。。。

未来

何日かして、5人での食卓も、寝る直前まで神楽や如月がそばにいるのも、3人での通学も、如月がいる教室も、4人で過ごす昼休みも、どーにかこーにか慣れてきた。

ようやく、違和感無く自然に笑えるようになり。

神楽と如月の驚異的な順応性を目の当たりにしたら、自然と“アタシも負けていられない！！”

って、若干意味不明な気持ちになっちゃって。

「ここんトコ、全然レジスタニア現れませんね。」

如月があっけらかんというくらい、ここ何日か何も無いし。

“嵐の前の静けさ”ってヤツで、神楽は逆に警戒している。

アタシは正直、それどころじゃあ、ない！！。

“環境の変化”についていくのが精一杯で。

やっと精神的にも落ち着いてきたし。

今日もベランダに出て星空を眺める。

今となってはすっかり定番の、“神楽コーヒー”を片手に。

今日は下弦の月。

あの満月の夜からもう7日も立つんだね。

“もう”なのか、“まだ”なのかは、イマイチなトコだけど。

『神楽？』

いつものように、アタシのデスクでPPを操作中の神楽を呼んだ。
すっごく今更なんだけど、ふと気になるコトがあるから。

『ハイ妃杏様。』

神楽は、いつ、どこで、何をしていてもすぐに飛んできてくれる。
申し訳無いような嬉しいような、フクザツな気持ち。

『アタシが消えた後って、どうなってたの？』

「えっ？」

神楽に一瞬の躊躇いが見えた。

アタシが自分からそういう話を切り出すのが意外なんだろう。

「しばらくは超極秘機密にして懸命な搜索作業が行われておりましてが、何せ次期後継者であらせられますから、そう国民の目は欺けませんでした。国家の威信に懸けても全力でありとあらゆる手を使って搜索して、先日やっと発見に至りました。皇王様はじめ御家族

方はもちろん、全国民大喜びです。」

自分から言い出したコトとは言つものの、やっぱりちと辛くなつちやつた。

“ 帰らなきゃいけない ”

つて身に詰まされるから。

『 どうしても帰らなきゃいけないの？ 』

アタシ、往生際悪過ぎだろ…。

涙浮かんでるし。

返事に困る神楽。

『 ごめんね。 当たり前だよな？ その為に神楽達がいるんだから。 』

涙を拭きながら。

「 先日満月の夜がリミットと申し上げましたが、リミットを越えますと、恐らく強制的に戻らなければなくなる可能性が大変高いようです。 」

強制的に…………。

胸がキュッと縮むような想い。

両手を強く握りしめて。

目を閉じると涙が溢れた。

!!!!!!!!!!!!!!

ペンダントが。

黒く光っている。

今日は誰の声も聞こえないケド。

神楽の顔を見るとシブい顔の神楽がいたケド、点滅だからアタシは気にしなかった。

『前もあつたよ？その時には声がしたけど。』

なんてコトなく言ったハズだったケド・・・。

「それはいつですか？」

一段と陰しい顔。。。

アタシ、何かマズった？？

『この前の満月の夜の次の日。朝からいろんな声がしたよ？。如月にはお父様とお母様とお兄様じゃないかって言われたケド。』

「如月は知ってたんですね？」

うわお？

激しくマズった感炸裂！！

『その日の夜に如月と会ったから。』

上目遣いで、恐る恐る答える。

すかさず神楽は、隣の部屋に殴り込まんばかりの勢いで入っていった。

あひやあああああ。

ベランダから隣の部屋の様子を窓越しに見てみた。

ひやあああああ…。

凄い剣幕だよ。。。

「どうして報告しなかった!？」

ドスすら感じる。

如月、すっかり畏縮しちゃってるよ…。

神楽はひとしきり説教した後、またデスクに向かってPPPを操作し出した。

そおーっと神楽に近寄る。

『何か、、、マズかった?』

弱々しく言っちゃった。

「黒と言うのが気になります。声の主が本当に皇王様方かも気になりますし。」

眉間にシワをぎゅうぎゅう詰になるくらい寄せてる。

アタシはそおっとベッドに入った。

“ 触らぬ神にたたりなし ”

先人達の教えに従いましょう……………

またこの景色だ…。

辺り一面真っ白で何も見えない世界。

【妃杏…。】

声が聞こえる。

この声……

ペンダントに目をやる。

ピンゴ！……！！今回は黒く光っている。

昨夜とこの前聞こえた、如月が言うところのお兄様の声だ。

でも何故ココで？

って、ココって夢の中　なんだよねえ？

【妃杏！。】

声が近付く。

ハッとして後ろを振り向く。

誰もいない…。

え　つつつつつ？？？？？

前を向くと、いつの間にか男の人が立っていた。

体全体がビクンと揺れてしまった。

「妃杏！」

えっ？まさかこの声？？…。

『お兄様？』

「分かってくれるんだね。会いたかったよ。」

ペンダントはまだ光ったままだ。

涙が洪水のように溢れていた。

まだ外は真っ暗だ。

だけど、涙を拭いて、ベランダに出た。

出ずにはいらなかった。

まだ4時前か。

ほんのうつすら明るくなっている。

はああああ。

何だったの？さっきのは…。

夢？

それにしてもリアルすぎだぞ？

それとも如月の言ってた“イントロード”？

いや、頭痛も何も無かったよ？

何でもイイヤ、ペンダントがココにちゃんとあるから。

安心感でまた、涙が出てくる。

“命と同じくらい大事”

お母様のコトバを思い出して、じいじとストーンを眺めていた。

「妃杏様！ いかがなさいましたか？」

ドキッ！！！！！！！！！！！！！！

神楽の顔を見れない。

神樂に背中を向ける。

けど、すすり泣く声や仕草で泣いてるって気付いたらしい。

黙って隣に座ってくれた。

思わず神楽に寄り掛かつちやつた。

「何か飲みますか？」

“かゆいところ”に手が届くオトコ 神楽

でも、

「ううん、いいえ。」

自然と出たコトバだった。

素直な気持ちだった。

言った後に、物凄く驚いたケドね。

今は一番、コレが落ち着くわ。

「かしこまりました。」

一瞬困ったのか、反応が鈍かった。

寄り掛かってたら眠くなってきちゃった。

『ありがとう、寝るよ。』

アタシはまたベッドに入った。

ただの夢だから、神楽には言わないでおこう。

思い出してはまたうるっとしちゃうけどね。

アレはやっぱり夢だったみたい。

あの夢以来、全く平和なまま数日が過ぎている。

どうしちゃったんだろう。

1人想い更けるアタシをヨソに、如月はやっぱり璃音とイチヤイチヤ。

もうすっかり慣れちゃったよ。

「今日放課後、研究室で待ってる。」

昼休み、みんなで食事していると神楽が突然言った。

『へっ?』

「へっ??」

アタシと如月は同時に驚いた。

いつもは、

“ 妃杏様に来させるなんてマネ、死んでも出来ません!!!! ”

って、生真面目に、いつも高等部の生徒玄関前で待ってくれてるのに。

しかも含み笑いしてるよ?

何だろ。

2人で顔を見合わせて首を傾げた。

放課後――

「じゃね、妃杏!如月♪」

部活の璃音はさっさと教室を出ていった。

ウチらも急いで神楽のトコロへ向かった。

2人ともニコニコして。

心なしかいつもより速いスピード。

大学院の研究棟、神楽は機械工学研究科。

研究室に行ってみても神楽の姿は無かった。

「外にいるよ!」

中にいた院生仲間の人が、中庭を指差して教えてくれた。

えっ?

車いじり?

車の下から神楽と思われる足が見える。

中庭に廻り、神楽に声を掛けた。

車の下から神楽は顔を出した。

「如月、ソコの倉庫の冷蔵庫にお茶入ってるから持ってきてくれな
いか。」

「はい。」

神樂の顔、あまり見たコト無いくらいイキイキしてる。

そもそも神樂がいくら部下の如月にだって、任務以外の個人的な用を頼むコトなんて珍しい。

「ココに置いときますよ！ハイ、妃杏様。」

神樂に向かって叫び、近くの台に神樂の分のお茶を置いて、如月はアタシのトコロに戻ってきた。

アタシにもお茶をくれた。

『ありがとう。』

冷え冷えのお茶を一口。

走ってきてノド渴いたから凄く滲みるわぁ。

『神樂、楽しそうだね。』

如月に言った。

「エージェントには1人1人各々に得意分野がありまして、チーフは特にエンジニアなんです。チーフの場合はオールマイティなんです。」

如月が夢中で機械いじりをしている神樂に目を向けながら話してくれた。

だからなのか、如月、ホントに楽しそうな顔してる。

『オールマイティなんて凄いね。』

お茶をもう一口。

「チーフは、伝説のエージェントなんです。」

“伝説のエージェント”？

「エージェントになるには、アカデミアに入る前からインペリアルゲートに入るまで毎月行われる試験で全項目で8割以上を取り続けなければいけないんですが、チーフは全てにおいて満点だそうです。」

思わず鳥肌が猛烈な速さで立つちゃった。

「そんなエージェントは未だにチーフ1人だそうです。正直、担当がチーフだって聞いた時は心が折れかけました。ケド、そんな人の下につけるのが自信になってます。」

嬉しそうな顔してるのはいいけどさあ、、、

その自信、間違った方向に進んでないか？

ちょっと失笑しちゃう。

「だからホントはチーフは現場でも研修担当でもなく、本来ならbossの下にいてもおかしくない方なんです。」

また鳥肌が…。

『bossの下って、神楽って何歳なの？?』

顔がひきつる。

bossもbossで“最高責任者”って言うには若く見えただござあ。

「ワタクシの3期上なんで、、、22歳です。」

三度目の鳥肌。

にじゅうにい？

bossの下ってコトは省庁で言うなら事務次官ってトコよねえ。

22歳で事務次官って…。

あり得ない…。

今の時代の22歳って、ストレートで入省してその歳でしょ？

なのにすでに事務次官候補…。

神楽が恐ろしく神に見えてきた。

『そんな人がこんなトコにいてイイの？』

身震いすらしてくる。

「あの顔見ると、アリかなって思います。」

如月の顔がヤケに清々しかった。

確かにその通りかも知れない。

神楽と出逢ったこの何日間かで、恐らく一番イイ顔してる気がするもん。

しばらくして汗だくの神楽がようやく現れた。

アタシはとっさにカバンからタオルハンカチを取り出して神楽に差し出した。

「そんな、妃杏様からそんなコトを…」

恐縮する神楽。

あゝ ああああ！！！！！！　　まったく神楽はどうしていつもそうなの？

アタシは神楽のコトバの途中で立ち上がり、ゴーインに神楽の額の汗を拭いた。

当然、神楽のコトだから一段と恐縮したけど渋々タオルハンカチを受け取ってくれた。

『どこまで真面目なの？神楽は！！。』

ココまで来ると呆れるよ。

「コレ、どうしたんですか？」

話題を変えようと如月が車に近付いた。

「教授がカスタマイズしてみろって。かなりポンコツだけどオマエなら再生出来んじゃないかって仰って下さって、資料用で使ってたのをもらった。因みに未成年のオマエにはアレ。」

神楽が指差した方にはバイクがあった。

「マジスか?????」

かなりコーフン状態の如月。

バイクにむかって猛ダッシュで駆け寄っていった。

“未成年の”って、実年齢は19なんでしょ、如月は。

イヤミだな、神楽なりの。

ホントに神楽や如月を見ると200年以上も先の人間なのか疑わしくなるわ。

でも、未来人だからこそ出来る業なのかなとも思っけどね。

何にしたって、未来には無い（とアタシは思っている）モノをこんなにいとも簡単にカスタマイズしちゃうんだから、さすが“伝説のエージェント”だわ。

つくづくそんな人がアタシのSPでイイのか、疑問だ。

しかもこの車とバイクには念の為、車・バイクごと空間移動出来る為の機能をプログラミングしたらしい。

良く把握できないんだけど、PPの機能を内蔵したってコトらしく。

万が一、運転中にレジスタニア反応を示した場合に対応できるようだとか。

ただただ感服です。

とは言っても通学は今まで通り電車。

今日も相変わらず少し前を如月と璃音。
イチャイチャしながら

その背中を見るように、後ろをアタシと神楽が大した会話も無く歩いている。

駅に着くちよっと前、

多くの自転車が駐輪場付近で込み合って駐輪場に向かう中を1人の男の子が猛ダッシュで走ってきた。

自転車に驚いて転んでしまった。

自転車は何事もなく通り過ぎて行っただが、男の子は勢い良く転んでしまった為、膝と肘を擦りむいて固まっている。

当然アタシは駆け寄る。

『大丈夫？』

アタシは駆け寄ってすぐにカバンに手を入れた。

と同時に横からスツと手が伸びた。

しかも手にはウェットティッシュが。

神楽だった。

どうして??

一瞬ハテナがブツ飛んだけど、とりあえず使わせてもらっコトに。

『ありがとう。』

手当をしてあげていると、如月と、例の如く呆れ返った璃音がやって来た。

『気を付けてね！』

立ち上がり、男の子を見送る。

「またやってんの？　たくアンタは何回言ってもダメなんだから。」
すっかり見慣れた、璃音の“腕組み仁王立ち”姿。

膝をパンパン叩いて構わずアタシは歩き出した。

「妃杏は小さい頃からこうだから。」

笑いながら神楽が言った。

アタシは心の中でひきつっていた。（顔は変えずに。）

何だか含み笑いにすら見える。

何？コレ。

何こんなトコでアニキのフリしてんのよ。

ヘンなヤツ…………

使命

「ホントに平和ですね。」

依然としてレジスタニアの攻撃がないまま。

クッションに座ってPPでレポートを作成していた如月が言った。

今日は新月だからベランダはお休み。

あと2週間――

ベッドの上のアタシは何と無く感じていた。

“もしかしたら今夜か明日、何かが起きる。”

って。

満月の夜も下弦の月の夜も、共通してペンダントが光ってる。

「もしかしたら今夜か明日、何かが起きるかも知れません。」

アタシのデスクでPPを操作中の神楽。

アタシはギュッと胸が掴まれてる気がした。

“神楽には敵わない”

“神楽の目はごまかせない”

って。

と同時にあの“夢”を思い出した。

お兄様が現れてペンダントをゴーインに取られそうになって・・・。

ちよって身震い。

またあんな夢見ちゃうのかなあ。。。

『神楽…。』

「ハイ妃杏様。」

神楽はいつもアタシの隣にいてくれて、アタシのして欲しいコトを迅速にかつ的確にしてくれる。

如月よりも絶対的な信頼感もある。

「今夜はずっと居りますから大丈夫です、ご安心下さい。」

アタシの心を読み取れるのかって疑っちゃうくらい、的確。

任務でやってるだけだって分かっても、グッと来るよね。

『ありがとう。』

何でわかつちゃうんだろ。

“今夜はずっと側にいて”

って。

しかも神楽の“殺し文句”とも言つべき“「大丈夫です、ご安心下さい」”には、医学的な安心感がある。

今のところペンダントに反応無いし、

今夜は安心して眠れそうだね。

あゝだまゝがいゝだいゝいいい

あまりの痛みに目が覚めた。

神楽、まだ起きてたんだ。

『神楽…』

声が出ない!!

『か………』

どうして？声が出ないよ。

景色が歪んでる??。

ペンダントは？

点滅してる！！！！！！

イッキに血の気が引く。

神楽ああああ！！！！！！

どうして聞こえないの?????

部屋の景色がどんどんゆがんでいく。

神楽ああああ…。

ハッ！！！！！！！！！！

お兄様。。。

痛みでばやあんとしか見えないけど、お兄様が目の前に。

神楽ってば！！！！

「オレが分かるか？」

エッ？

じゃあこの前のは???…

声が出ないコトに、もがきながらも頷く。

「良く分かってくれたね、嬉しいよ。だけど、残念ながら今はどうあがいても神楽には妃杏の声は聞こえないよ。コレは妃杏の意識の中だから。夢でも現実でも無いからね。」

お兄様の顔は笑顔だった。

でも冷たさを帯びていた。

氷のような冷たさ。

アタシは全身で震えを感じていた。

心臓もかなり速く動いている。

ペンダントの点滅はまだ止まない。

「どうして震えるの？」

掛けるコトバは優しいけど、顔は氷のように冷たかった。

そのコトバにアタシは余計震えてしまう。

『・・・して？』

声が出た！！。

涙で声がかすれてるケド。

『どっして？』

お兄様の手はペンダントに向いている。

胸が握りつぶされそうな程に苦しい。

まさかあの夢みたいに？

点滅は激しさを増す。

あまりの胸の苦しさに息が苦しくなる。

アタシは咳き込みながらもペンダントを握って隠す。

『ストーンは渡さない。』

震える声でアタシはお兄様を見据えて言った。

夢では言えなかったコト。

『この前、こんな、夢を、見たわ。その時、も、お兄様は、苦しむ、アタシに構わず、ストーンを奪おうと、した。』

息を整えながらゆっくり話す。

「この前？」

お兄様の顔が険しくなる。

『お兄様??』

お兄様の姿がぼやつと消えていった。

『お兄様?????』

「妃杏様???」

景色の歪みは消えていた。

お兄様を呼んだつもりがいつの間にか現実に戻っていたようで、アタシの声は現実の神楽に聞かれていた。

アタシはストーンを握ったままで。

……全くワケが解らない。

自然と涙が出ていた。

「妃杏様!？」

神楽がアタシの両腕を強く掴む。

表情は強ばっている。

アタシは泣くばかりで何も言えなかった。

アタシは憔悴しきっていた。

ただただ泣くコトしか出来なくて。

神楽の掴む手を振り払ってベランダに出た。

神楽が悪いとか、責める気は更々無い。

でも近くにいるのにどうにもならなかったもどかしさはどう頑張っても拭えなくて。

神楽の顔を見れなかった。

『1人にして。』

神楽に背中を向けたままで言った。

するとドアが閉まる音だけが部屋に響いた。

また涙が溢れた。

その後、アタシは夜が明けるまでずっとその場から離れられなかった。

アタマの中は、もちろんお兄様のコト。

ひたすらストーンを見つめたまま。

部屋を出た後、少しして神楽はコーヒーを持ってきてくれた。

ただアタシは素っ気なく『ありがとう』ってだけ告げるだけだった。

ボロボロ泣きながら。

しばらくして日が昇って来たのを見たら、またボロボロ涙が出てきた。

『神楽？』

泣くだけ泣いてスッキリして、アタシは神楽を呼んだ。

分かってたよ、ずっと…。

寝ないで部屋で待機していてくれたコト。

神楽は気付いてたかどうか分からないけど、アタシはチラチラ部屋の方を見てたよ。

颯爽と神楽はやって来た。

「ハイ、妃杏様。」

どこにいても何をしていても来てくれる。

…ハズなのに、どうしてさっきは来てくれなかったの？

そう思ったらまた泣けてきちゃう…。

「妃杏様！-！」

いきなり泣き出すアタシに困惑の神楽。

仕方無いよね、イントロードじゃどうにも出来ないよね。

でも最後のお兄様の顔、気になるな。

『車、出してくれる？』

アタシのムチャぶりに、神楽は笑顔で返事してくれる。

それがまた心無しか、切ない…。

まだ寝ている如月は起こさずに置き手紙をして、2人で出掛けた。

向かった先はひだまり園。

どうしようもなく、来たくなつたの。

まだ時間が早く、園長先生が外の掃除をしているだけだった。

でもそれで良かった。

ただ来たかっただけだから…。

車の中から園長先生の顔を見たら胸が熱くなって、涙が滲んできた。

『この時代に迷い込んできて、すぐにココに連れられてきたの。』

向かってる途中、道案内するだけで何も話さなかったから神楽、ビツクリしている。

しばらく車の中からひだまり園を眺めていた。

ひだまり園に来た日のコトや、ココでの2年間が動画で浮かんでくる。

涙が滲んできたけど、我慢しなきゃ!。

もう、泣いてばかりいられないよ。

ココから全ては始まったんだから。

何だか、衝動的にココに来たけど、来て良かったな。

今までの自分を振り返れたから。

心の中にあっという間と消えなかったモヤモヤが、すーっと消えて、晴れやかな気持ちになった。

不思議と、心は神がかり的に晴れやか。

『お腹空いた!。帰ろっ!。ありがとう。』

超スツキリな表情で言うと、神楽も爽やかな笑顔で頷いて車を発進させた。

「お帰り。 “出掛けてきます” って、どこ行ってたのよ。」

玄関を開けるなり、血相変えたママが物凄い勢いで駆け寄ってきた。

今日も学校。

なのに朝から出掛けるなんて、そりゃいくら置き手紙してっただって驚くのが普通だよな。

「ちょっと出掛けてきます。いつもの時間には戻ってきます。心配しないでね!。お弁当は如月にお願ひしました。神楽・妃杏」
って。

キッチンに行くと、如月がいつの間にか用意したマイエプロンをして、楽しそうに準備していた。

「お帰りなさい。」

何かを察しているかのような笑顔。

『ありがとね。』

アタシ、笑顔で言った。

結局神楽には、昨夜のコトも言わなかった。

助けてくれなかったコト、怒ってるとかじゃないよ。

相手がレジスタニアならまだしも、実の兄だから、自分で解決しなきゃいけない気がして。

だからあんなに、お兄様に言えたのかも知れないな。

「行ってきました!。」

『行ってきました。』

「行ってきました。」

3人で家を出るのももうすっかり自然。

痛つつつ!!

今、一瞬ダケだけアタマに激痛が走った気がした。

思わずアタマを抱える。

「妃杏様？」

すかさず神楽がアタシの顔を覗き込む。

『大丈夫。』

作り笑いで答えたけど、、

頭痛???

まさかねえ。

ストーンに反応無いし。

でも・・・

頭痛って、イントルードの時に出る現象だね。

過去2回とも激痛がずっと続いたけど、今回は一瞬。

気のせいだよね。

しかも昨夜の今日なんて、尚更あるワケ無いよ。

ところが、1回では無かった。

璃音と合流して駅に着いた辺りでまた激痛。

「少し休みますか？」

と神楽。

『大丈夫。』

今度は苦笑い。

寝てないからかな。

一応痛み止め飲も。

駅を出てすぐコンビニでミネラルウォーターを買って痛み止めを飲んだ。

「妃杏様？」

ん？

なぜか神楽に呼び止められる。

あ、れ？

アタシ、神楽から離れてる??。

隣を歩いてたハズ・・・だよねえ。

神楽がちよっと前にいる。

しかもアタシ、歩道の端（道路側）にいる。

神楽は塀側に立っている。

どういうコト？

まさかアタシ、蛇行してる？

「フラフラ歩いてるよ。」

人前だからタメ語な神楽。

フラフラ？

そうなの？

自分では自覚症状無いんだけどなあ。

再び神楽と並んで歩き出す。

校門で分かれる際、神楽は神妙な顔で

「無理なさらないで下さいね。」

アタシの側で、小声で言った。

『大丈夫だよ。』

今度は普通の笑顔で答えたものの、痛み止めを飲んだにも関わらず、痛みは未だに治まらない。

フラフラも、自覚し始めてきて。

「大丈夫？ 妃杏。」

璃音も眉を下げて心配してくれる。

「保健室行く？」

如月も憂慮の表情。

『大丈夫！』

アタシは半作り笑い。

アタマが重く感じてきた。

何だろ、やっぱり寝不足だなきつと。

と思っていた矢先の出来事だった。

アタマがボゥツとしてきたよ？。

座ってるのにフラフラするし。

全然痛み止め効かないし。

何だってんだよ、一体…。

先生の声が歪んで聞こえてくる。

「じゃ神崎、この英文を壇上で説明してくれ。・・・神崎？？」

ん？

顔を上げると先生がアタシを見てた。

机に手を付いて立ち上がった瞬間、、、

イツキに視界が激しく揺れて視界が廻り出した。

「神崎??」

「妃杏!？」

それまで歪んで聞こえていたみんなの声が、ヤケにクリアに聞こえた。

次の瞬間、アタシは真つ白な世界にいた。

良く来るなあ、ココ。

アレ？頭痛もフラフラも歪みも治まってる。

・・・ま、さ、か？？？

2日連続来ちゃったあ？

心拍数、急上昇！！！！！！

今日は誰？

ペンダントは？

何これ！！？？

∞ ♂ ■ ? ? ? ? ?

ストーンが勝手に浮かび上がってアタシの目の高さまで上がってきた。

かと思ったら、ストーンはまっすぐドコに向かい始めた。

アタシはストーンに引っ張られるようにストーンが向かう方向に歩く。

ドコ行くの？

歩いていると、突然お兄様が現れた。

2日連続でお兄様???

「やっぱり来てくれたね。待っていたよ。」

エッ?どういうコト???

眉間にシワを寄せる。

「昨夜、妃杏は“この前”って言ったよね。ソレ、オレも同じ夢を見たんだ。」

『夢えええ???』

とんでもなく声が裏返る。

「だから、もしかしてオレの潜在意識が何らかの形で妃杏の潜在意識とシンクロしたんじゃないかって考えたんだ。」

アタシとお兄様の潜在意識がシンクロ?

「だから、妃杏を強く呼んでみてたんだ、これで。」

そう言ってお兄様は、真っ黒な、漆黒とも言えるゴツゴツした、石と言うより岩のようなモノを見せた。

アタシのストーンがその岩のような物体に磁石のように引き寄せられた。

ピタッとくっついている。

コトバが出なかった。

心拍数は速いまま、またしても苦しくなってくる。

肩で息をし出すアタシを、お兄様はやっぱりただ見てるだけ。

はあ…、はあ…、

お兄様が笑顔になってる。

狂気すら感じる笑顔。

「妃杏が嫌いワケじゃないよ。このストーンが憎いんだ。だからこのデッドストーンをもっと強力にして、その時には直接妃杏の前に現れるよ。」

そう言うとお兄様の姿が歪んで、消えていった。

『待つて！！！！！！！』

叫んだ時にはまた景色が変わっていた。

「妃杏！？」

如月と璃音だ。

アタシはベッドの上にいた。

「悪い夢でも見てた？今叫んでたけど。」

しかめっ面の璃音。

アタシの額には汗がびっしょりで。

手も凄い汗。

「神崎は帰んなさい。早退届はアタシが出しとくわ。今お兄さんが車を取りに行ってるから。カバンは持ってきてもらってるから。神崎兄と笹崎はベル鳴るから教室に帰んなさい。」

保健室の先生がタオルを取り換えてくれる。

“お兄さん” ってコトバに、カラダが強く反応してしまった。

“神崎は帰んなさい” のコトバに顔を輝かせた如月も、その後の“教室に帰んなさい” でかなり肩を落とした。

璃音は吹き出し笑いをしたけど、アタシはちっともソレどころじゃ無かった。

『帰ります。ありがとうございました。』

タオルで汗を拭いてアタシはベッドを降りた。

「今アニキ来るよ?」

止める如月にアタシは冷たく言い放った。

『要らない、帰る。』

「じゃ行くよ如月！」

キョトンとする如月の手を引いて璃音も一緒に保健室を出た。

「イイよ、授業始まるからココで。」

階段の前で立ち止まり、璃音と如月と別れた。

「じゃね、妃杏！！お大事に！」

屈託の無い笑顔で手を振り、仔猫みたいな目をしてアタシを見つめる如月をゴーインに連れて階段を駆け上がった。行つた。

2人に背を向けた途端、猛烈に涙が出てきた。

今朝、もう泣かないって決めたのに。

ペンダントを握り締めて泣きじゃくっていた。

靴を履き替えて外に出ようと一歩踏み出した瞬間、神楽が必死の形相で駆け寄ってきた。

ドキン！！！！！！！！！！！！！！

心臓が激しく動いた。

うつ向いたまま、何も言わず神楽の横を通り過ぎた。

「妃杏様？」

神楽の声がキツく聞こえる。

気にせずアタシはスタスタと歩き続ける。

神楽は何も言わず後ろを着いてきたけど、アタシは車の前すらも泣いたままで通り過ぎた。

いい加減腕を掴まれた。

立ち止まる。

顔は見ずに。

「昨夜からおかしいですよ？いい加減話して下さい！！どうなさったんですか！！！！！」

見たコトのない、激しく激昂した神楽の顔だったけど、アタシは怯むことなく泣き叫んだ。

『言っでどうにかなるなら言っでるよ！！！！言っただってどうにもならないから言わないでしょ？そんなのも分かんないの？大体何なのよ！！何が“お護りします”よ！！！！！！笑わせるわ。護りきれないSPなら要らないわ！。1人にして。』

自分が最低なオンナだったのは承知だ。

アタシ、サイテー。

今アタシの背後には悲しそうな顔で立ち尽くす神楽がいる。

アタシは、そんな神楽に背を向けて前を見れない程に泣きじゃくりながら校門を出た。

ワケ解んないよ!!!!!!

実の兄に憎まれてどうしたらいいかなんて、誰にも解んないよ。

あまりの泣き様に、アタシは近くの公園のベンチで休むコトにした。

「どうぞ。」

声と共に、SMTとハンカチが差し出された。

『神楽?????』

ハッと顔を上げるとそこに居たのは…………

『bossううう?????』

だった。。。。

希望

目の前にいたのは、神楽でもなく如月でもなく、bossだった。

「改めまして朱雀にございます。」

bossまでやっぱりアタシに跪く。

『ヤメて下さい。』

人が見て、、無いね。って言うか、誰も居なかった…。

bossは白じゃなくて、黒のツナギだ。

boss、やっぱり若いよなあ…。

やっぱりホストみたいだ。

スタイル良いし。

bossがくれたSMTのお陰で気持ちが落ち着いたアタシ。

そんなコト言う余裕が出来てるよ。

『どうしてbossがいるんですか？』

アタシの問いに、bossは苦笑いした。

「妃杏様までbossはおヤメ下さい。しかも普通にお話下さい。

妃杏様にそんな話し方をされてしまったらワタクシは妃杏様にどう話せば宜しいんですか？」

プツツ。

b o s s っては可笑しく言うモンだから、ついつい笑っちゃったよ。

「落ち着かれましたか。」

b o s s って、神楽より神的な安心感がある。

きつとパパより若いんだろうけど、パパみたい。

あゝっつっつっ！！！！！

アタシ今、自分で墓穴掘らなかつた??

“神楽”って。。。

胸がギュツとなった。

ついぼんやり一点を見つめてしまう。

「神楽はあの通り言葉が少なく不器用で、自分を出さないオトコですから良く誤解を招きやすいのが難点です。」

ん？

b o s s が微笑みながら話し始めた。

アタシはbossを見てジッと話に耳を傾けた。

時々SMTを飲みながら。

「アイツはエージェントの中では一番、過去に類を見ない程に優秀でして、研修後すぐにセントラルセクションと申しまして幹部候補のいる部署に打診したのですが、3年経った今でも現場に居続けております。」

何でそんなコト今話すんだろ…。

『“伝説のエージェント”ってのは如月に聞いたよ。“未だに満点取り続けている”って。』

「そうでしたか。如月もお喋りですね。」

優しい笑顔のboss。

アタシはホントに心から安心していらっしゃるしく、疑問を全てbossにぶつけた。

“200年以上も未来なのに、名前にしてもコトバや行動にしてもヤケに未来感を感じないのはどうして?”

って。

話が脱線しているにも関わらず、bossは分かりやすく優しく教えてくれた。

「何百年経っても今の生活に慣れると昔のコトが良く思えて来るものです。」

って、実に簡潔に分かりやすく教えてくれた。

確かにね。

今だって古くても良いものは継がれてるもんね。

何か、モノ凄く簡潔だけど、モノ凄く深いコトバだったよ。

で、話は然り気無く元に戻った。

オトナだな、bossって。

さすが“最高責任者”…。

神楽のコーヒーの話を持ち出して、然り気無く神楽の話に戻した。

「神楽がアカデミアの試験を受けた際、ワタクシも面接官として会場におりました。普通、志望動機は“琉冠星の為に”ですとか“皇王様の為に”などを言うのですが、神楽だけ、その時は居られないハズの“妃杏様にお仕える為に”とキツパリ我々を見据えて言っただんです。」

えつつつつつ??????

顔が固まった。

「面接官全員がその時は驚きましたが、それほど気にしませんでした。ですが入省後の配属希望を聞いた際もやはり“妃杏様の捜索に携わりたい”と言うので不審に思いながらもとりあえずはそうしました。」

何で？

アタマの中かなり混乱。

「その後も依然として満点を取り続けているのでイイ加減ランクアップの打診をするんですが、何度しても“現場に居たい”としか言いませんでした。」

何？ストーリーカー？

恐怖すら覚えるよ。

アタシ、今凄い顔になってると思う。

「今回妃杏様のご無事を確認出来た時も、“自分を妃杏様に付かせて欲しい”と真っ先に来たので、さすがに今度ばかりは2つ返事で認めるワケにはいかないと思いついて、ワケを問いただしました。言わなければ認めないと言うと、神楽は一枚のポケットタオルと言う、今で言うバンダナのようなモノを胸ポケットから取り出しました。」

バンダナ？

思わず眉間にシワが寄る。

「そのポケットタオルにはインペリアルエンブレムが刺繍されており、その刺繍が入ったモノは我々も携帯しておりますが、神楽の持っていたモノは我々の持っているモノとは多少異なり、しかも良く見ると妃杏様のお名前入りでした。」

アタシの名前入り？

ワカンナイ。

アタシの顔を確認しながら話すboss。

「神楽は話し始めました。神楽が7歳の時、家族で皇王様が主催のパーティーに呼ばれ参加したそうなんですが、そのとき子供だけで中庭で遊んでいた際、神楽が階段から激しく転んでしまったそうなんです。」

.....

思い出せないぞ？。

「子供達タケですからオトナは妃杏様のSPだけでしたのですかさずSPが神楽に駆け寄ったのですが…、」

あゝ ああああ！！！！！！

アタシはイツキに鳥肌が立った。

アゴが外れるくらいに口を開けて。

「思い出されましたか？」

b o s sの意味深な笑顔にアタシは小さく激しく頷いた。

あの時のコトがイツキに蘇ったから…。

神楽だったの？

神楽は今22歳・間もなくアタシは17歳〃5歳。

当時の神楽は7歳！当時のアタシは2歳〃5歳！！！！！！

『SPよりアタシが一目散に神楽に駆け寄り、オトナの手を借りずにアタシが応急処置をしたんだ。その時に使ったのがポケットタオルだった。』

アタシがレジスタニアに教われた時のコトを思い出した時と同じような勢いで、今アタシの忘れていた記憶がラッシュで蘇ってくる。

「周りの子供達はもちろんSPも圧倒される程の毅然としていて迅速な対応に、神楽は妃杏様に忠実を尽くすコトをその時に誓ったそうです。」

アタシは愕然とするしか無かった。

“ また1人、妃杏様に忠義を尽くす者が増えちゃいましたね！”

“ 妃杏は小さい頃からこうだから”

あのコトバはそう言うコトだったんだ！！！！！！！！

そんなあ…。

それだけで15年も??

どこまで生真面目なのよ。

「その後止めるSPを振り切り、インペリアルホスピタルのドクターをお呼びになり、神楽に処置を受けさせたそう。皇妃様に確認したトコロ、皇妃様も思い出されたそうで、大変驚いておいででした。」

お母様?

ああ、お見送りした時に隣にお母様がいたっけ。

って、相変わらずあたしや何者なんだよ!!

我ながら未恐ろしいガキだよな。

「タオルを返しそびれてしまい、ソレ以来ずっと神楽は肌身離さずタオルを持っていたそうです。」

堅物もイイトコだよ。

天然記念物並みだな。

「アイツは妃杏様付になるコトだけを目標に、アカデミアからずっと満点を取り続けて来たそうです。将来皇王となる御方のSPとなるとそう簡単にはなれないですから。」

アタシ、半泣き。

泣かないって決めたでしょ!?

「アイツなら大丈夫です。ワタクシがココにいるのは、アイツが困り果てた顔でワタクシのトコロに来たからなんです。“妃杏様を著しく傷付けてしまいました。今ワタクシが妃杏様の元にいるワケにはいきません。代わりをお願い出来るのはbossしかいません。他のエージェントにはお願い出来ません。”とアタマを下げられました。」

神楽…。

ダメだ、涙で視界が滲んでくる。

『アタシ、どうしたらいいの?…。神楽を傷付けたよ?』

bossは神がかったような微笑みで答えてくれた。

「」安心下さい。」

bossの視線の先には車で迎えに来ていた神楽と如月の姿があった。

滲んでいた涙が激流に変わった。

その後3人の前で昨夜のコトと昼間のコトを話した。

3人が3人、絶句状態だった。

アタシの報告によつぽど衝撃を受けたみたいで神楽は、夜部屋ですつとPPに向かいつきりだった。

「妃杏様をサーチアップしたの、ワタクシじゃなくてチーフだったんです。」

今日は珍しくベランダに如月が来た。

神楽が一心不乱にPPに向かっているのを見かねて来てくれたんだね。

「でもワタクシに行かせてくれたんです。ソレが無かったらワタクシは今頃、妃杏様の恩赦を頂く前にとくにベースバックになっていたに違いありません。ですからチーフには一生アタマがさがりません。」

苦笑いで話した。

アタシは薄笑い。

「初めは担当がチーフだって聞いて、正直やる気が失せました。実際やってみても口を開けば怒鳴られるだけで。でも、今はチーフがチーフで良かったって心底思ってます。」

へえ。

意外と素直じゃない。

「今、センターでは誰が妃杏様のセクシヨンの責任者になるかって話題で持ちきりなんです。」

思わず口に含んでいたお茶を噴水のように吹き出してしまった。

「妃杏様！大丈夫ですか??？」

如月が慌てて拭いてくれる。

忘れかけてたよ。

“ 神楽を妃杏様セクシヨンの責任者に任命したいのですが ”

b o s s のコトバを。

「このまま妃杏様がいてチーフがいてワタクシがいて。最強ですね。」

「

空を見上げて言う如月の顔は無邪気そのものだった。

『アタシなんかのSPでいいの?』

不安一杯のアタシ。

そりゃ知らない誰かが付くよりは、神楽と如月がいてくれる方がラクだけど…。

「何言ってますか妃杏様!。」

へっ？

「風呂、行ってきますね。妃杏様は何かを勘違いなさってますよ？」

如月は含み笑いを浮かべて部屋に行ってしまった。

どういうコト？

“妃杏様は何かを勘違いなさってます”???

何を?????

おっ!?!この香りは!!!

「どうぞ。」

神楽コーヒーだ。

『神楽、ごめんね。』

やっと言えた。

「何がですか？」

あっけらかんとしている神楽。

まったく、ムカツクわあ。

『アタシね、宇宙飛行士になるのが夢だったんだ。神楽は?』

わざとあの話に持つていくためにアタシはこんな話を切り出してみた。

「もう叶いました。」

へっ？

拍子抜けしたけど、何と無く予想付くな…。

「でも、実際はそんな簡単なコトじゃありませんでした。」

ん？？？

普段は自分からは多くを語らない、しかも自分のコトなんか尚更喋らない神楽が嬉しそうに話し出した。

「幼い頃にある御方にとってもお世話になりました、ソレ以来ある御方にお仕えするコトを夢に掲げ、ここまで参りました。」

その“ある御方”ですが何か？

「先日その夢が叶いましたが、叶っただけでした。だからまだ夢の途中です。」

“夢の途中”？

『ドコがゴールなの？』

聞かずにはいらなかった。

じゃないと本題に入れないから。

「その御方にご満足頂けるまではゴールとは言えません。」

「まったく、何処まで真面目なのよアンタは!!」

真面目?とは違うかなあ。

『バカじゃないの? たった一度助けてもらっただけでその後15年も一途に想い続けるなんて!。 一歩間違えばストーカーよ? 呆れてモノも言えないわ。』

つい抑えきれずに言っちゃったよ、勢いで。。。

うわああああ。。。

モーレッツに後悔。

神楽の顔、見れない。

「でしようね。」

ん? 笑ってる??

“でしようね。” って、アンタねえ…。

でも、嬉しそうだよ?

『じゃあ聞くけどさあ、その“ある御方”が、アンタの未来のコト

で悩んでたらどうするっ。」

「は???」

啞然とする神楽。

アタシはコーヒーに口を付けた。

やっぱり美味しいワ。

『ある御方”が神楽を責任者に任命するコトを承認してくれってbossに言われて困ってんのよ。神楽みたいなハイレベルなエンジニアが自分なんかの責任者なんかでイイのかって。もっとイイ未来があるハズなんじゃないかって。』

恥ずかしいiiiiiiii。

顔は平然としているけど、内心はかなりバクバク。

アタシ、下手だなあ。

我ながら、下手さに天晴れだわ。

アレ？神楽、黙ってる…。

表情、固まってるし。

うわあ、気まずううう。

どうすんのよ？この沈黙。

星空を見上げて考え込む。

「ワタクシごときのコトでそこまで御気遣い頂いていたコトが申し訳なくて申すコトバもございません。」

ようやく声を絞り出すように静かに話し出した。

神楽のこんな聞いたコトの無い声に、ちよつとうるうる。

「ワタクシはその御方に忠義を尽くすのが夢ですから、その御方の御意思に従うだけです。」

神楽…、涙声??

「如月が帰って来ましたので入浴して参ります。」

タイミング良すぎだろ…。

ったくさあ、どうしたらイイの？

だって事務次官になれるだけの力がある人がアタシのイチSPなんかで良いワケ無いじゃないのよ。

でも、“アタシが戻ったら”か…。

あと2週間で強制送還…。

現実味、あるようで無いなあ。

「まだお考えになっていらしたんですか？」

如月登場。

アタシは大きく頷く。

『如月…、どうしたらイイと思う？』

如月ってば真剣に悩むアタシを見て楽しんでんのか、やたらとニヤケてる。

『何よその顔…。』

口を尖らせるアタシ。

「bossから何も聞いてないんですか？」

何？この思わせ振りの発言は…。

……… んん？？？

bossう？？

「インペリアルゲートは、最高責任者のbossの下が皇王様のセクションの責任者になります。」

何だ？突然…。

「その下が、順に後継者様、皇大王様、皇妃様、皇后妃様、皇子様方の責任者になります。」

ん
ん
ん
?
?
?

その下が後継者様？

すなわちアタシいいいい？？

目を大きく見開く。

ますますニヤケる如月。

思い出した！！！！！！！！！！！！！！

bossのコトバ！

“将来皇王様になれる方のSPですからそう簡単にはなれません”

つて！？

もしかして???

「お分かりになりましたか？チーフは、結局と言うか、いよいよナンバー2になれるんですよ。」

何
い
い
い
い
い
?
?
?
?
?
?。

「何なのよアンタ達！？どうして言うてくれないのよおおお！！」

顔を赤くして如月に叫ぶ。

「妃杏様、チーフが御好きなんですね。」

！？ @*# → ↑ ← ↓ ∞

『何なのよbossも如月もお！！！！からかってんの？？？』

如月、大爆笑。

「じゃ、妃杏様の責任者の座が空くのも時間の問題ですね。」

『はああああ？？？？？？？？』

思いつき抑揚をつけて。

『如月、何言ってるの？』

目をつり上げて尋ねる。

「研修が終わってもワタクシは妃杏様にお仕えさせて頂きますね！」

「

如月って、何気に妄想男？

でも、想像しちゃった。

アタシがいて神楽がいて、如月がいる未来。

・・・ん？待てよ？？？

はああああああああああ。。。。

一瞬にして妄想が吹き飛んだ。

『違う！！！！！』

いきなり立ち上がり叫んでしまった。

うろたえる如月。

「どうなさったんですか妃杏様！！！！！」

血の気が引いた。

叫んだコトに恥ずかしさを感じたからでは、無い。

戻る前にしなきゃイケない何よりも大事なコトを、思い出したの！
！。

『お兄様を助けなきゃ！！』

「何を仰ってるんですか？妃杏様！！！助けなきゃって…。」

如月は、ただただ驚いている。

『お兄様言ってたもん、アタシが憎いんじゃないや無くてストーンが憎いんだって。だとしたら、ココにいるウチに何とかしないと宇宙の彼方に追放されちゃうんでしょ？』

やだアタシ、取り乱しちゃってるよ。

「だからココにいる間に攻撃してくるんじゃないですか！琉冠星に戻れば攻撃して来ないですよー！」

慌ててアタシをなだめようとしている。

『そうじゃないよ！それじゃダメだよー！』

半泣きのアタシ。

「妃杏様…。」

如月の声が困っているのが聞いてるだけで分かる。

「如月、妃杏様の仰る通りだ。」

「チーフ！」

『神楽、聞いてたの？』

違う意味で血の気が引く。

「申し訳ありません。盗み聞きするつもりではありませんでしたが。」

生真面目神楽は足を揃えて深々と謝った。

『ヤメてよそんなつもりで言ったんじゃないから。ホントに堅いね、神楽は。』

「申し訳ありません。」

おいおい。。。。

呆れ顔のアタシの隣で如月は、小さく吹き出し笑い。

「ですが、ワタクシも妃杏様のご意見に同意見です。如月だって皇子様とご一緒に、皇子様がという御方かわかっているだろ。」

「ですが…、」

えつつつ???

『お兄様がアカデミア?』

ドキツとした。

「王室の方々も、エージェント候補生と一緒にってアカデミアで聴講的な形で講義を受けるのが慣例になっております。ですから、妃杏様もお戻りになった後はアカデミアに入って頂きます。」

ほっ…。

胸を撫で下ろす。

てつきり良からぬ想像をしてしまった。

“後継者じゃないからアカデミアに?”

って。

何気にアタシも妄想女だったりする？

『お兄様ってどんな人？』

ずっと気にはなっていたけど、聞くきっかけが無かったコト。

何せ幼い頃の記憶しか無いから。

「誰とでも分け隔てなく接して下さいます。裏表無く、とても気品を感じさせる御方です。周りからは大変慕われておりました。」

“裏表無く”

『やっぱりお兄様を助けなきゃ。』

アタシの必死の訴えに、如月はまだ渋っている。

「bossが皇子様の身边を極秘でリサーチしております。お待ち下さい。」

神楽が冷静に言った。

「“お待ち下さい”って、そんな場合じゃないですよ！！妃杏様は二度も皇子様に狙われているんですよ？」

啞然とした。

あの如月がこんなにアツくなっているなんて。

いつもは“お気楽でマイペース”で、ムードメーカー的な存在なのに…。

神楽にだってアタマが上がらないハズなのに、今神楽に食って掛かっている…。

『如月…』

声を掛けずにはいらなかった。

『いいの。コレは、アタシ一人の問題の様な気がするから。』

こんな如月、見たくないよ…。

だからアタシ、割って入った。

「妃杏様…。」

如月の悲しげな顔…。

神楽はずっと神妙な表情。

『ありがとう、如月。凄く嬉しいよ。でもね、レジスタニア相手なら如月や神楽達エージェントにお願いしようもあるけど、相手は実の兄なのよ？しかも原因はこのストーンで。』

アタシは自分の感情を抑えて、静かに話した。

努めて笑顔で。

じゃないと泣きそうだったから。

如月が笑顔に変わった。

「やっぱり妃杏様は凄い御方ですね？チーフ。」

「ああ。我々はいくまでも妃杏様をお護りするのが務めだ。妃杏様がそう仰るのならそれをサポートするまでだ。」

神楽も優しい笑顔に変わった。

『ありがとう！』

心の底から安心した。

“ 2人がいれば怖いものナシ ”

って思えて。

だからこそ、何の屈託もない、飛び切り自然な笑顔になった。

同時に、

“ 2人がいれば、何でも出来る ”

って言う、絶対の自信も付いた気がした。

夜明

神楽が一生懸命PPを夢中で操作していたのは、お兄様が言っていた“デッドストーン”について調べていた為だった。

そんな中で、アタシはあるコトに気付いてしまっていた。

下弦の月の夜にアタシとお兄様の夢がシンクロした。

新月の翌日にお兄様の強い想いがあたしの潜在意識を呼び込んでしまった。

と言うコトは、上弦の月の日か翌日辺りに何かまた起こる。

もしかしたらアタシの意思で出来るんじゃないか――

そう行き着くのも不自然な話じゃないよねって。

そう思ったら、当然今度はアタシがお兄様の潜在意識に入り込む方法を探りたくなる。

たまらず神楽と如月に相談してみた。

「何を言い出すんですか妃杏様！――！」

真っ向から否定する如月。

「プラチナムストーンは選ばれた御方しか所持出来ない上に、所持している方それぞれに発するパワーが異なる為、想像以上のパワー

を發します。ですので可能性を否定は出来ません。強く念じてみれば叶うかも知れません。」

神樂はそう言ってくれた。

「チーフ!!!」

如月は否定派のようだ。

『ありがとう如月。でも、やってみたいんだ。』

アタシがそう言ってしまうと、従うしかない如月には申し訳ないけど。

如月は、アタシの気持ちを知ってるからこそ神樂に噛み付いてでも言ってくれてる。

泣きたいくらい嬉しいけど、アタシが神樂の気持ちを知っちゃってるだけに、とってもフクザツだったりするんだな・・・。

正反対なコンビだからこそいいのかもね。

今日は終業式。

実質的には最後の登校なんだよね…。

込み上げてくるモノがあるよ。

でも泣かない！！

第一、周囲から怪しまれるし…。

とは言ってもやっぱり潤んではいるよ。

ぐずってるし。

「妃杏、風邪引いた？」

璃音が心配そうに声を掛けて来てくれる。

『鼻風邪かな。』

なんて、ごまかしてみて。

朝、制服に着替えた時からちよつとキテル。

『璃音、写メ撮ろっ！！』

怪しむ璃音をヨソに、アタシは至るトコロで撮りまくった。

想い出の場所で。

駅前や校門、教室で。

ちよつど夏休み前の最後の役員会があったから、生徒会メンバーとも撮影。

メチャクチャ我慢したよアタシ。

自分でも驚く程に。

初めは“人間どれだけ泣けるんだろうか”ってくらいしょっちゅう泣いてたけどね。

今じゃ我慢出来てる。

成長したな、アタシ♪。

「大丈夫ですか？」

如月が隙を見て声を掛けて来てくれる。

だけど、我慢してる時の“大丈夫？”は想像以上に効き目が大きいんだよね…。

今にもダムが決壊しそう。

頑張れ！アタシ。

何だかこの時代からいなくなるって、イマイチ実感が無いクセに泣けてくるのはなぜだろう。

コレが“本能”ってヤツ？？

サヨナラ、恭新。

中学から5年間、お世話になりました。

校門を出る寸前で振り返り、心の中で別れを告げた。

「妃杏様！」

帰り道の途中、如月が突然ひきつり気味の表情でアタシの胸元を見た。

如月の視線はアタシのPPだ。

PPが光っている。

エッ？どうすんの？

慌てるアタシ。

「大丈夫です妃杏様。手をかざしてみてください。」

冷静沈着な神楽の指示に従う。

PPはこの時代に無いモノだから、周囲の人にはアタシがPPを操作しているしぐさは見えないんだっけ。

落ち着いてPPに手をかざす。

アタシの目の高さにPPから光が伸びて、TVモニターのようなモノが現れた。

久々だから記憶がリセットされてるかってくらい新鮮に驚く。

b o s sだ。

「妃杏様、皇子様の件なんですが。」

『分かったの?』

つい声が大きくなってしまふ。

「大変申し訳ありません、申し上げ難いのですが、ワタクシ一人の力ではちよつと厳しいモノが御座いまして…、」

嘘おおおん。

ちよつと目の前が暗くなった。

「皇王様に御伝えしても宜しいでしょうか?」

一瞬にして心臓がペシャンコに潰された。

アタシはb o s sのコトバを途中で遮り即答した。

『ダメ!!!!絶対ダメ!!!!!!お母様もダメ!!!!!!お願い!!!!!!
!!!!!!』

アタシはb o s sに手を合わせて懇願していた。

「かしこまりました。では皇大王様は…」

お祖父様？

お祖父様……かあ。

アタシはしばらく考えた。

歩きながら。

どうしても誰かに言わなきゃいけないのだとしたら、やっぱりお祖父様かなあ。

神楽の顔を見上げる。

神楽はただ笑顔で頷いた。

『bossがそう言うならいいよ。その代わりお祖父様だけね。』

言った後、神楽をもう一度見た。

神楽ももう一度笑顔で頷いていた。

如月を見ても反応は同じだった。

「ワタクシの力不足で御迷惑をお掛けしてしまうコト、大変遺憾に存じます。妃杏様の苦渋のご決断、大変感謝致します。」

bossの姿が消えた後、アタシはなぜか溜め息をついていた。

ホントはこの4人で片付けたかったな。

無意識のウチに空を見上げていた。

お兄様　　。

手はストーンを握り締めていた。

ここのところ、お兄様のコトを思うとなぜか自然とストーンを握り締めている。

神楽のコトバが効いているんだと思う。

“強く念じてみれば叶うかも”

って。

暇さえあればストーンを触ってる。

お兄様の潜在意識にイントルード出来たところで、酷くショックを受けるかも知れない。

でもアタシはお兄様のホントの“ココロ”が知りたい、ただそれだけなの。

夜、星空を眺めていると、視界の隅で光を感じた。
視線を下に落とすとまたPPが光っていた。

bossだった。

「何度も申し訳ありません。皇大王様がどうしても直接お話がしたいと仰いまして。」

え……………！！！！！！！！！！

表情が固まる。

今、誰かの顔を見たら確実に決意が揺らぐよ。

でも、15年逢ってないんだもんな、変わってるよね。

どうせ聞くなり伝え聞くよりは直接の方がいいしね。

『どうぞ。』

数秒もしないで、お祖父様が現れた。

一気に涙が込み上げてきたけど、グツと唇を噛み締めて我慢する。

「妃杏、長い時間掛かってしまったコト、大変申し訳なく思う。」

お祖父様の優しい声に、さらに唇を噛み締める。

声に出したら泣いちゃうから、首をヨコに振る。

「立派に成長したと聞いて大変あんしんしているよ。今回のコトもコトバが出ない程に感心したがどうしても黙っていられなくてな。妃杏の気持ちを考えるとこうするべきでは無かったんだろうが。」

お祖父様の表情が、悩んだコトを物語っていた。

また首をヨコに振って、大きく深呼吸したあと口を開いた。

『アタシこそ身勝手なコト言つてごめんなさい。どうしてもココにいるウチに解決したかったから。』

言つた後、もう一度深呼吸した。

「大きくなつたな。」

お祖父様は目を細めた。

「まさか琉雅（りゅうが）（お兄様）がそんなコトをするなんて、まさに青天の霹靂で、正直困惑している。と同時に妃杏に何と言つてイイか、本当にコトバが無い。申し訳無い。」

はあああ！

お祖父様がアタマを下げる。

『ヤメてお祖父様！お祖父様が謝るコトじゃないもの。誰のせいでも無いよ。』

つい心臓がバクバクしちゃったよ。

「妃杏と琉雅の様なケースは過去にもあつて、そのうち何度かやトリトラブルにはなつてしまっていたが、こういう形は例になく、どうしたら良いか判断に悩むトコロだ。」

そりゃそうでしょうねえ。

まさか時空を越えて、しかも惑星まで越えるなんて、そうそう前例があるハズも無いよな。

「琉雅が過去に行つた惑星等を調べてはいるが、なかなかデッドストーンの謎にたどり着かないのが現状だ。もしかしたら合成の可能性もある。」

『見た感じは熔岩みたいな感じ。』

「熔岩??」

お祖父様の顔がイツキに険しくなった。

「一刻も早く解明する。」

真摯な表情で言ってくれた。

間もなくお祖父様の姿が消えた。

その後、アタシはベッドに入るまでずっと空を見上げていた。

手にはストーンを握り締めて…。

ベッドに入ってからストーンは手はそのままストーンに触れていた。

あれ？

ココどこ？

夢？・・・だよねえ。

もしかしてお兄様の潜在意識の中？？？

アタシ、空飛んでる？

下に建物が見えるから。

、、、、もしかして生家？

王室？？

どうなってるの？一体…。

神楽あ！！！！如月い！！！！bossう！！！！

・・・無反応…。

当たり前だよな。

アタシ、勝手に移動してるよ。

完全に夢だな。

ってコトはやっぱりお兄様の夢が潜在意識の中だな。

今夜、上限の月じゃ無かったのに…。

でも、神楽の言うコト信じてみて良かったな。

なんて考えてるうちに、アタシは王室の中に入っていた。

またしても今まで失っていたハズの記憶が、実際の光景を見て怒涛の様に甦ってくる。

アレ、地下にむかつてる？

地下なんて行ったコト無いよ？多分。

エッ？アレはもしかして、お兄様？

子供の頃のお兄様に見えるけど。。。

「琉雅様あ！」

うわっっっ！！誰か来る！！どうしよう…。

お兄様を呼ぶSPらしき声と足音がする。

ヤバッ、隠れなきゃ！

エッ？

お兄様はある御部屋に入っていた。

しかも扉に何かを触れさせて。

だいたい地下ってアタシ、行っちゃいけないって言われてたよ？

どうしてお兄様が？

ゲツ！SPが降りてきた。

しかも2人も。

万事休すだ！

仕方無い開き直って教えちゃえ！

『お兄様はこ…』

聞こえてない？

アタシの姿も見えてない？

嘘でしょ？

ん？

アタシ、浮いてるってもしかして幽体離脱？？？？？？？？？？

んなワケないよね。

ってコトはあの御部屋に入れちゃう？

!!!!!!!!!!!!!!

壁抜け…、扉抜けしちゃったよ！

中にはお兄様がいた。

何歳のお兄様だろう。

ってお兄様、何してんの？

ええええええ？？？？？

全身を駆け巡る言い知れぬ悪寒。

薄暗い室内で、お兄様はある物体をひたすら見つめていた。

狂気にも見える表情で。

しかも廻りには同じモノがたくさんある。

もしかして、デッドストーン？？？？？

お兄様がこの前持っていたモノよりもはるかに大きいけど。

デッドストーンの正体って何なの？

うわあああ！

石が喋った！！

【後継者は妃杏では無い。琉雅、お前だ。】

いやあああああ！！！！！！！！

あまりの恐怖に声が出ない。

「後継者はオレ……。」

お兄様？？？？？

心拍数があり得ないくらいに速い。

息が出来なくなりそうくらいに。

何なのコレは？

そして何でアタシの存在に気づかないんだろう。

h?

場面が変わった。

ココは？

ドコが分からないけどまたアタシは空にいる。

地上にはたくさんの方がいる。

??
??
??
??
?
?
?
?
?
?
?

あの服装はレジスタニア！？

心臓がいくつあっても足りないよ！！

あゝ ああああああああ

レジスタニアの集団の前にはお兄様が立っている。

しかもさつきよりは大きくなってるけど今のお兄様では無い。

何歳だろ。

「妃杏様がいない今こそ後継者の座を琉雅様に！」

全身の血の気が瞬速で失せた。

気すら失うくらいに。

何度も全員で連呼している。

こんな恐怖、感じたコト無いよ。

金縛りみたいな感覚に襲われている。

身動きが出来ない。

でも解ったよ、解決法が。

早く神楽達に教えなきゃ。

って、どうやって？

あつつつ！

神楽とか如月の名前を強く呼べばいいんだなきつと。

神楽！如月！神楽！！如月！！

何度も何度も繰り返す。

早く助けてよバカあああ！

神楽あああ！！！！

「妃杏様！？」

『神楽ああああ！！！！』

目の前に神楽がいた。

風景もアタシの部屋になってて。

泣かないって決めたのにまたしても泣く。

しかもかなり号泣。

目の前の神楽に抱き着いちゃって。

さすがにあんなの見ちゃったら、今だけ泣かせて下さい。

ひたすら泣き続けるアタシを神楽は黙って優しく包んでくれていた。

隣には如月もいて。

如月はさりげなくSMTを差し出してくれた。

『ありがとう。』

「何となく妃杏様の声が聞こえてふと目が覚めたらチーフも目が覚めて。」

アタシの“バカああ！！！”が通じた？

アタシは声を震わせながら全部話した。

「地下のお部屋、、、ですか？」

神楽も如月も不可解そうな顔。

「我々も立ち入るなど言われておりますので。」

と首を傾げる如月。

「bossに報告させて頂いてよろしいですか？」

神楽の眉間のシワが重大さを物語っている。

アタシまで眉間にシワが寄っちゃうよ。

「ストーンが喋るって奇怪ですよね？」

いつの間にか如月はPPを操作していた。

アタシが全部話し終わった頃には、部屋の空気はどんよりとしていて暗くて重かった。

「やはり妃杏様のご推察通り、皇子様をお助けしなければなりませんね。」

神楽の表情が少しだけ和らいだ。

「でもレジスタニアのトップにまさか皇子様がいらしたなんて。」

如月らしからぬ神妙な顔。

『さすがにこのコトはboss以外には言わないでね。』

アタシ、低いトーンで言った。

神楽も如月も大きく頷く。

いくらお祖父様にだって言えないよ。

理由はどうであれ、お兄様がレジスタニアだったなんて。

どんなに悲しむか。

『そんなにストーンって絶対なの？』

アタシ、上目がちな眼差しで尋ねる。

おどろおどろしく如月が答えてくれた。

エージェントの中でまことしやかに囁かれている噂によると、過去にアタシ達のように上下逆転して後継者になったケースの中で、後継者じゃない方が継承したコトがあったらしいんだけど、その直後に、噴火するハズのないプラチナムマウンテンが噴火して、理論的には考えられない自然災害が起きちゃったんだって。

慌てて後継者を本来の方に戻して、事態を収めたらしいんだけど。

琉冠星の人間である以上、ストーンには逆らえないってワケか・・・。

アタシにとってはお守りだと思っていたペンダントが、今は何だか重く感じる。

『神楽には兄弟は？』

「姉がおります。」

上かよ！！でも女性か。

『御姉様か。いいね！。』

ウチも女同士だったらモメなかったかな…。

『もしさあ、神楽がお兄様の立場ならどうする？』

神楽に聞くのが間違ってそんな質問を、あえてぶつけてみる特攻野郎なアタシ。

“「ワタクシはストーンの示す通りに忠実に行くだけです。」”

とか何とかシレ〜っと言って退けちゃうんでしょ、どうせ。

って、考えてるううう!？。

「出ました!」

突然如月が叫んだ。

如月、いつの間にPP操作してたの？

「地下には、過去に追放された王室の方の追放された際に発生した塊が嚴重に保管されているそうです。」

周りの空気が一変した。

『お兄様はデッドストーンとレジスタニアに操られているだけなのよ!—!』

アタシは叫んだ。

「直ちにbossと皇大王様に処分して頂きましょう。」

すかさず神楽がPPに手をかざした。

メール？

時空も惑星も飛び越えて？

理解不能だワ。

何、この記号だらけの暗号みたいなのは…。

そう言えばアタシ、神楽にしろ如月にしろPPを操作している姿は良く見るけど、どんなコトしてるかなんて気にしたコト無かったなあ。

全く何を書いているか分かんないや。

「でもチーフ？あの御部屋をどう処分するかは別として、皇子様やレジスタニアが余計に反乱を起こす可能性は無いでしょうか？」

如月がしかめっ面で言う。

「当然可能性としては否定出来ない。だがその塊がデッドストーンの正体である以上、放っておくワケにはいかなかったらう。その辺の対策も含めて報告する。」

何だかココ何日かの如月、メチャクチャ頼りになるんだけど…。

ついに（やっと）開眼した？

妄想男如月、いよいよ本領発揮か！？

その後ウチらは結局一睡もしないまま朝を迎えた。

あの地下室が、お祖父様のストーンの力で消滅されたと言う報告を受けたのはその日の夜だった。

お兄様はあいにくなのか幸いなのか、琉冠星にはいなかったらしい。

瞬間

とうとう全く何の攻撃もないまま上弦の月の夜を迎えた。

タイムリミットまであと1週間・・・。

ホントは今すぐにも琉冠星に戻りたい。

お兄様が気掛かりだから。

でも、一度戻ったらもうココには戻って来れないって言うから、まだ琉冠星には戻れないや。

だから今は様子をただ見守るしかない。

b o s s を信じて…。

神楽と如月の部屋で、3人で寝るコトにした。

神楽と如月に同じベッドで寝てもらって。

眠くなるまでずっと3人で話してた。

琉冠星のコトを色々聞いたりして。

聞いているうちにイメージが浮かんできて、アタシはある“決意”を思い始めた。

まだ如月にも神楽にも言わないよ。

明日を思つ存分楽しみたいから。

明日は昼前から璃音と4人でお出掛け。

その後、璃音はウチにお泊まり。

多分コレも最後だよね…。

悔いの無いように思いつきり楽しむぞい！！！と。

結局何も起きないまま朝を迎えた。

でも油断は出来ない。

璃音と一緒にの時に何か起きたらどうしようって、ハラハラしてる。

「おっはよお」

神楽の車で璃音の家にお迎えに。

アタシも璃音も思いつきりオシャレして。

向かった先はショッピングモール。

4人でって言ってもはしゃいでいるのは璃音と如月^{なぜか}だけ。

アタシの心中は依然ハラハラ。

恐らく神楽もだと思っ。

昨夜“決意”を思い始めた時にもう1つ思っコトがあるんだ。

あるジュエリーショップの前を通った時、アタシは璃音の腕を掴んで中に入った。

「どうしたの？」

驚く璃音に、アタシは璃音をさらに驚かせる発言をする。

『お揃いでピアス買おっか！』

驚きのあまり璃音は立ち止まり、大声を發した。

声に反応して璃音の顔を見ると、璃音はものすごく目が飛び出しその顔になっていた。

あまりの凄さに思わず吹き出してしまった。

でも、璃音の反応は無理もない。

今までアタシは、何度璃音に“ピアス開けよう”って言われても拒否し続けてきた。

だから璃音が驚くのも当然だろう。

「じゃ誕生日プレゼントにアタシが買っよ。」

店の外でつまらなそうにしている如月と笑顔でこっちを見ている神楽。

アタシと璃音はその2人を尻目に、キャッキヤ言いながらピアスを選ぶ。

「妃杏、コレは？幸運の石だってよ？それとも単純に誕生石にする？あつ、妃杏コレがイイんじゃない？恋愛運アップだってよ。」

「お揃いでしたらこちらお勧めですが…。」

あーでもないこーでもないと大騒ぎしているウチらに見かねてか、店員さんが寄ってきた。

店員さんが勧めて来たのは“絆”を深める力のある数種類の石だった。

絆・・・

ちよつと胸が熱くなる。

数種類ある中でダイヤもあつたんだけど、ファーストピアスでダイヤは無いだろうと言うコトで、ファーストピアスに相応しく、ガーネットにした。

「毎年1つずつ増やしていこうね。」

レジで無邪気に笑う璃音に、アタシは泣くのを堪えるので精一杯だった。

その後併設している皮膚科で穴を開けてもらい、アタシは人生初のピアスを着けた。

『トイレ行ってくるね。』

如月と神楽に告げて、アタシと璃音はトイレに入った。

鏡の前で2人でピアスを改めて見る。

「いいね、お揃いで♪」

喜んでくれてる璃音のあどけない表情、モーレッツにたまらない。

泣くのを堪え過ぎて時折吐きそうになるよ。

「次どこ行く？オトコ2人つまらなそうだよ。」

なんて笑い合いながら手を洗っていた時だった。

「妃杏??…」

璃音の顔が見れない。

璃音の声がひきつっていて…。

しかも、自分の視線を動かせられなくて…。

水が流れているアタシの指先が透けて行く。。。

全身の力が指先に集中してる。

ストーンが真っ黒になっている。

トイレを出ようとする璃音の手を掴んだ。

手の透けが収まっている・・・。

ストーンの黒い光も収まっている。

ワケが分からなかったけど、とりあえず安心。

璃音も、戸惑いながらも何も無かったかのように接してくれてる。

だけどアタシの心中は、かなり動転しまくっている。

今も心臓、凄まじいコトになってるよ。

「妃杏様？」

神楽が不安げにアタシを見る。

「お顔の色が宜しくありませんがどうか耐えましたか？」

エッ？

何故か無意識に自分のほつぺたを触る。

「熱、あるんですか？」

さらに不安げになる。

いや、違う!!。

『気のせいじゃない?大丈夫だよ。』

アタシ、苦笑い。

でも、神楽は見抜いてた。

アタシが無意識のうちに、手やストーンをしきりに見ているコトを。

ジュースやお菓子やケーキを買って、店を後に、車に乗り込んだ。

と、その時!!!!!!

ストーンが再び真っ黒になった。

アタシ、すかさず立ち止まる。

「妃杏?また??」

先に乗っていた璃音の声が緊迫している。

思わずアタシは手を後ろに隠してしまった。

でもストーンが黒いコトには、神楽も如月も気付いている。

「妃杏様？またって…」

如月が思わず“様”よばわり。

「様？」

当然璃音が反応。

心拍数、スピードMAX！！

何もかもが終わったみたいないな絶望感。

運転席に座ろうとしていた神樂が険しい表情でアタシの手を掴んで
勢い良く歩き出した。

!!!!!!!!!!!!

アタシたまらず立ち止まる。

足まで透けてきてるから。

どろろ…璃音がいるのに。。。

恐怖で声が出ない。

少しするとまた光は収まり、手足の透けも治っていた。

「妃杏様、またとはどういう意味ですか？」

当然神楽の声が厳しい。

顔も険しい。

『その前に、璃音が……。』

ひきつり全開の顔でアタシは車に目を向けた。

「璃音様にお話しになりますか？」

顔は険しいままだったけど、声はどことなく優しくかった。

『話さないワケにはいかないでしょ。2回も見られちゃってるから。』

心のうちでは堪らなく泣きたいのに、何故か泣けなかった。

でも、表情は泣きそうだけど。

「かしこまりました。どのみち妃杏様が琉冠星にお戻りになられたと同時に璃音様の記憶からは全て消えますので。ワタクシがお話し致します。」

“全て”？・・・

モーレッツに胸が苦しくなったけど、泣かないよ。

神楽に“全てって？”って聞きたいけど、今は聞かないよ。

璃音に分かってもらう方が先だから。

車に戻ると、如月と璃音は何事も無かったようにいつもの様にイチヤイチヤしていた。

「遅いよ2人共お！暑いんだからあ！」

いつも通りの璃音に、胸が熱くなる。

「エンジン掛けてつてよアニキい！」

如月もいつも通り。

「ゴメン。」

ひきつり笑顔の神楽は、エンジンを掛けてすぐにカラダを後ろに向けて座った。

アタシは如月のトコロへ行き、如月と場所を代わってもらっ

如月は助手席へ。

『璃音、驚かないで聞いてね。』

アタシのメチャクチャ渋い顔に怯みながらも璃音は優しく微笑んだ。

「何を話そうとしてんのかは分かんないけどさあ、大丈夫だよ。この前如月と神楽サンが話してんの聞いちゃったし、さっき劇的にスゴいモノ見ちゃったから。多分聞いてもワケ分かんないだろうから

「イイよ。妃杏が妃杏でいるコトに変わらないでしょ？」

ケロッツと言う璃音に、アタシは我慢の限界を振り切りその場で号泣、如月は目に涙を浮かべ、神楽はただただ微笑んでいた。。

その後車内は、依然大盛り上がりの後ろ2人のお陰でいつも以上に賑やかな雰囲気になった。

『2人のこの仲の良さはフォールアップの影響じゃないよね？』

バックミラーで2人を見ながら、神楽に尋ねた。

「ここまで来るとそうだと思います。コレはおそらく素だと思われます。」

自然な笑顔の神楽。

何だか嬉しくなるよ。

璃音が凄く愉しそうで。

…と同時に、切なくもなるな。

こんなに楽しい時間が永くないなんて…。

「妃杏様のご親友だけに、璃音様も大した御方ですね。脱帽です。」
信号待ちで神楽がアタシの方を見て言った。

思わずドキッとする。

ダブルで照れちゃうよ…。

『付き合い長いからね。』

バックミラーに映る璃音に向かって答えた。

神崎家に来て、幼稚園に転入してすぐに声を掛けてきてくれたのが璃音だった。

“養女だから”って避けるコもいる中で、璃音はずっと一緒だった。

遊ぶのも勉強するのも習い事もずっと一緒に。

異常な程に一緒だったね。

小5の冬に、恭新に行くって言い出せないでいたアタシに、璃音ママから聞いたって言って、一緒に目指してくれて。

性格も趣味も好きなタイプも別だけど、ココまで合うとは思わなかったよ。

何故かバックミラーの璃音をずっと眺めていた。

ほくそ笑みながら。

家に着いてすぐに神楽は部屋に向かった。

アタシと如月と璃音はパパママと夕飯の準備。

実は今日はアタシの誕生日パーティー。

如月が璃音を誘ってくれて、如月と神楽でパパママに話してくれたんだ。

2人には感謝してもし尽くせないよ、ホントに。

リミットまであと6日、誕生日まであと5日、

アタシ、もう神崎家では誕生日祝えないかもって、諦めてたんだ。

いつ突然に、お兄様やレジスタニアに攻撃されるか怖くて。

だから、祝ってもらえるだけでモーレッツに嬉しいの。

正直、さっきはホントにもうダメだと思ったよ。

終わりだと思った。

だから、今まだココにいるのが、モーレッツに嬉しい。

こんなに嬉しいコトがこんなにもあるのかってくらいとにかく嬉しい。

でも逆に、さっきの事件でアタシの決意は強固なモノになっちゃっ

たっ！。

明日、璃音が帰ったら2人には話すよ。

だから今夜はとことん楽しむぞい♪♪♪

準備が一段落して、入浴タイムに突入する為、一旦部屋に戻った。

ウチらが部屋に入ったのが声で分かったらしく、神楽がアタシを呼びに来た。

隣の神楽達の部屋に行く。

『何？』

ごく自然に尋ねる。

「琉冠星にしか存在しないものはこの時代の方には見るコトが出来ないので、bossに相談して調べましたトコロ、こちらの石がこの時代にも存在するコトが分かりましたので、特別に、璃音様には見えておりませんが、妃杏様とお揃いと言うコトで、妃杏様のブレスレットと同タイプにbossが依頼して作ってもらってくれました。」

神楽はそう言って箱を出した。

何のためらいもなく、手をかざして箱を開ける。

中には水晶のブレスレットが入っていた。

石の数、石のカットの形、しかも名前が入っているコトとエンブレムの刻印までアタシのと同じだった。

「余りにも感動致しまして、璃音様の先程の話をbossにしましたらbossも大変感動致しまして。」

みんなの優しさに、目頭が熱くならないワケが無かった。

「妃杏様のコトは恐らくお忘れになると思います。」

やっぱり……。

アタマを殴られた様な衝撃は受けた。

だけど、泣かなかったよ。

覚悟はしてたし、さっきのコトバのお陰でそんなの怖く無くなったし。

それどころか、

“もしかしたら璃音に限って…”

的な期待も持ちつつ。

「ですので、せめてと言うコトで。」

神楽の顔が今まで以上に優しかった。

泣かないよ！？絶対泣かない！！。

この約3週間でかなり泣いたもん。

もう泣いてばかりいられないモン！！！！！！

笑顔で部屋に戻った。

『ちよつと！！何やってんのよ！』

部屋に戻ると、如月と璃音がアタシのアルバムを話しながら見ていた。

「想い出話よ。」

そうじゃなくて…。

まあいつか！！

別に璃音に見られちゃマズい写真なんて、何一つ無いしね。

「殆どの写真、璃音と一緒になんだね。」

璃音に気付かれていても、何食わぬ顔で普通に話してくれる如月の嬉しそうな表情に、アタシも璃音も崩れるくらいの笑顔で答えた。

「如月、風呂。」

え、つつつつつ？？？？？

もしかして一緒につてコト？

「エッ？あつ、はい…。」

思わず敬語になってしまつくらいに動揺しているのは如月だけじゃ無かった。

アタシと璃音もだった。

「時間短縮！」

真面目な表情でビシツと言い放つ神楽に、アタシと璃音は吹き出してしまった。

如月と神楽がいなくなった部屋で、アタシは璃音にブレスレットを渡した。

お別れは言わないよ。

どうせ忘れちゃうなら悲しませない方がイイからね。

ただ、これだけは言わせてね。

『璃音、今までありがとう。コレ、アタシから。これからもずっとよろしく。』

ギリギリ涙声。

ぐずぐずはしたけど。

「エッ？いつの間に？？」

驚く璃音。

『秘密！。』

なんてね。

「つて、何で？何記念？」

かなり慌ててたけど。

アタシは泣きたいのを史上最高の笑顔でごまかす。

「誕生日の前渡し。見た瞬間に、“璃音にあげなきゃ”つて、直感的に思ったの。繋ぎ目のプレート見て？」

《r i o n & a m p ; h i a n》

名前は名前でも、2人の名前が刻印されてたんだ。

見た時は、さすがに涙目になっちゃったよ。

「何？何コレえ！」

目が飛び出そうな璃音。

「何かさっきのアタシのプレゼントがちゃっちく見えちゃっくん！凄いいおおい！！」

うつ向いてアタマを何度か左右に振った。

璃音、分かってるようで分かってない??

いや、こんなに鈍感じゃ無いハズだぞ?

まさかワザと?

だったら憎いマネするな!!

こっちは我慢してんだからああ。

パーティーも一段落してみんなまったりし始めて、パパのご機嫌もかなりよろしくなってきた頃、パパがおもむろに立ち上がった。

部屋に行ったかと思ったら、すぐに戻ってきた。

『ハイ、妃杏。』

紙袋を差し出された。

袋にはジュエリーブランドの名前が入っていた。

「凄いじゃない妃杏! ラズキスだよ?」

胸に込み上げる熱いモノを抑えるのが限界寸前だった。

まさに破裂寸前!!!!!!!!!!

ラズキスはラズベリーキスの略称で、女子高生に大人気の、女子高生にはちよっとお高いブランド。

中を開けると、中にはリングが入っていた。

アタシは堪らず歓喜の声をあげた。

「凄い！」

はしゃぐ璃音。

アタシも目がキラキラしちゃう。

涙と喜び両方で。

リングの裏を見ると、シルバーの刻印の横に名前が刻まれていた。

ダメだ、限界!!!!!!!!!!

涙が溢れてきた。

しかも、側面には小さな石が数個埋め込まれていた。

『コレって……。』

さっきピアス探してた時に見たよ？

「ラピスラズリだよ！幸運の石！！」

璃音も覚えていた。

ダメだ、ヒクヒク言い出してきたよ。

肩を震わしちゃうよ。

アタシは泣き声のままパパママに言った。

『パパもママもありがとう。ホントにありがとう。』

何度も何度もありがとうを繰り返した。

彼方

パーティーの後はみんなで片付けして部屋に戻った。

神楽と如月はbossとミーティングがあるからって隣の部屋に。

アタシと璃音はベランダに出て、神楽コーヒーを飲みながら星空を眺めていた。

話す内容はいつもと変わらず至って他愛も無いコト。

だけど今夜は特別だった。

もう最後なんだなって、どうしようもなく感慨深いモノがあつて。

ココで星空を眺めるってのも何だかモーレッツに切なく思えてきて。

どさくさに紛れて上を見てるのをイイコトに、ちよつと涙を堪えてマス。

話は全く尽きず、気が付くと夜が明け始めていた。

日の出をみるなり、なぜか2人で大あくび。

2人で笑い合い、璃音の一言でベッドに入った。

「寝よつか？」

よっぽど璃音には日の出が睡眠導入剤になったのか、すぐに眠って

しまった。

アタシはコーフンしていて、なかなか眠れない。

璃音の寝顔を見ていた。

ウルウルしながら…。

ぬつつつつ？？？？

ペンダントが激しく点滅している。

一瞬にして緊張が全身に駆け巡る。

静かにベッドを抜けて、音を立てないようにベランダ経由で隣の部屋に急いで向かう。

…途中だった。。

突然周りのモノ全てが歪み始めて、地震でも起きてるのかってくらいに足元がおぼつかなくなっちゃって。

気付いた神楽が駆けつけてきてくれた。

神楽が差し出した腕に掴まろうとするんだけど届かなくて。

伸ばした手の指先がまた透けてきて…。

「妃杏様！！」

わずか数cmのハズの神楽の指先が全然届かない。

どうして？

次第に神楽の姿まで歪んでいく。

『神楽！？』

呼んでもムダだった。

視界の歪みはいつの間にか真っ黒な空間に変わっていた。

『神楽？』

言い知れない恐怖感。

喉はカラカラ、心臓は驚異的にバクバク、全身ガクガク、息も出来ないほど苦しい。

ストーンは激しく点滅したまま。

でも、必死に握り締めて神楽の名前を呼ぶ。

【妃杏様！PPに触れて下さい！！】

神楽！？

神楽の声が聞こえる？。

幻聴？？

何でもイイ!!

藁にもすがる思いでPPに触れた。

するとPPから光がまっすぐに真上に延びていった。

光が天高く延びると、ブレスレットからも光が放たれた。

その光が周りを照らして、周りの景色がはっきり見えた。

その瞬間、アタシは愕然とした。

アタシは“あの服装”のレジスタニアにぐるり一周取り囲まれていたのだ。

全身の血の気が引いた。

恐怖で体が凍り付いた気すらした。

どうしたらいいの??

「なぜあの地下室のコトを知っていたんだ!!あの地下室が消えて無くなってしまったせいで、琉雅様が壊れてしまったではないか!」

マスクで隠れていて分からないけど、レジスタニアの中から声が聞こえた。

“サーッ”って音が聞こえるくらい、アタマが真っ白になった。

『ふざけないで！！お兄様はアナタ達やデッドストーンに操られているだけなのよ？壊れたのはアタシのせいじゃなく、操っていたアナタ達のせいじゃないの！！！！！！』

口が勝手に動いていた。

自分が一番仰天した。

こんなコト、本人達を目の前にして言えちゃうなんて…。

「琉雅様は我々に操られてなどいない。琉雅様はデッドストーンに導かれた御方なのだ。我々は琉雅様をお支えしているだけだ。」

何かでアタマを物凄いスピードで殴られたみたいだった。

首がガクンてなるかのようなダメージ。

“デッドストーンに導かれた”

ショックでショックで仕方無かった。

言い様のない、余りにも強烈過ぎる、怒りすら覚える感情。

「ふざけないで！！何が“導かれた”よ。冗談じゃないわ！！！！お兄様を返して！！」

力の限り叫んだ。

レジスタニアの1人が腕を振り下ろした瞬間、何かが天から降って

きた。

デッドストーン??

えゝ えええ?????

アタシの指先が再び透け始めてきた。

物凄いスピード!

足元も透けてきている。

いやああああ!!!!!!!!!!

あっという間に手も足も透けていく。

ストーンを掴んでいる感覚はまだある。

お願い!!!!アタシはお兄様を助けたいの!!!!!!

ただそれだけなのおお!!

【妃杏様!!!!!!】

神楽??????

神楽の声がしたと思ったら、降り続けていたデッドストーンが急に消えて、アタシのストーンが眩い光を放ち、辺り一面をその光で覆い尽くした。

あまりの眩しさに、目を閉じてしまった。

光が収まったような気がして目を開けると、ベランダに戻っていた。

『妃杏様？』

がぐらゝだあゝあゝあゝ！！！！！！

全身の力が一気に抜け、思わずその場にへたり込む。

あまりにも安心して過ぎて泣くことすら出来なかった。

きつと人間、感情のメーターを振り切り過ぎると、逆に何も出来なくなるんだと思うな。

神楽が肩を掴んでくれた。

「大丈夫ですか？」

涙、出たいけど出ない何だか気持ち悪い状態。

アタシは小さく頷く。

『レジスタニアに囲まれた。デッドストーンが降ってきた。』

声は涙声。

おどろおどろしい面持ちのアタシ。

アタシはあるコトを思い出して、ついつい取り乱してしまう。

『お兄様が壊れたって！地下室が無くなったからって。レジスタニアが言ってた！！助けなきゃ！早く…』

お兄様のコトになった途端、涙が勝手に出てきた。

『bossに…、お祖父様に言わなきゃ！！御父様やお母様もお護りしなきゃ。』

ダメだアタシ、かなり錯乱してる。

「落ち着いて下さい妃杏様！今bossにコンタクト取りますから。とりあえず璃音様が起きると行けませんので、お休み下さい。」

険しい顔の神楽に促され、アタシは部屋に戻った。

心臓はまだバクバク、アタマの中もお兄様のコトでいっぱい。

璃音の寝顔に、少し癒される。

璃音のパパママじゃないけど璃音が愛おしく思えてきて、熱いモノが込み上げてきて、肩を震わせてグズってしまった。

ダメダメ、璃音を起こしちゃうよ…。

枕を顔に押し当てる。

もう外は完全に明るくなっていた。

洗濯回してこよう。

コレが最後だね…。

お風呂掃除もするか。

涙は出なかった。

不思議と、清々しい程に。

さっきは泣いちゃったのに、ホントに不思議だね…。

やっぱり、人間覚悟を決めると強いって言うのはそう言うコトなんだね。

もう、時間が無い。

お兄様を助けなきゃ。

満月、最後にココでもう一度見たかったけど、満月までは待てないな。

パパママの寝顔、見てくるか。

もう見れないからね。

時間が時間だけに、そろそろ起きる時間だから、起こさない様にそおっと入室。

ありがとう、パパ。

ありがとう、ママ。

10 数年、ホントにありがとう。

あゝつつつつっ！！そうだ！

部屋に戻って璃音の様子を確認した後、隣の神楽達の部屋に入った。

「妃杏様、起きてらしたんですか？」

呆れ半ばなのか、失笑気味に神楽が言った。

『パパママにも何か残したいんだけど…。』

ご機嫌を伺うように、そおゝっと上目遣いで言ってみる。

「もちろんご用意致しております。タイミング的にまだかと思いまして。」

ため息つくしかないよ。

人間業とは思えない気の回りっプリに。

時々神楽は人間じゃ無いんじゃないかって思うよ。

『ありがとう。』

パパママが起きてきて、リビングから聞こえる物音や匂いにつられ、
璃音が7時過ぎに目覚めた。

『おはよう。』

自然な笑顔で。

「おはよー。」

寝ぼけ気味の璃音は、いつもと変わらない璃音のままだった。

リビングに下りると如月がもうソファでゆったりしていた。

神楽もキッチンでコーヒーを入れていて。

いつもと全く変わらない朝の光景。

ソレが今のアタシにはとても胸に染みる。

込み上げる涙が辛い。

涙を我慢しながらモノを食べるのって、吐きそうになるね。

ちよつと学習。

パパママを見送り、璃音たつてのリクエストで璃音は如月のバイクで部活へ向かった。

ホントは、最後に璃音の家までの道を2人で歩きたかったけど、いい加減璃音に疑われても困るから諦めたよ。

璃音が見えなくなるまでいつまでも手を振り続けた。

“ありがとう”

って何度も呟きながら。

やっぱり肩は震えていた。

「妃杏様。」

神楽の手がアタシの肩に掛かった。

ヤメてよ、こんな時に声を掛けられたら泣いちゃうじゃない。

『泣くからヤメて!』

精一杯の笑顔で言った。

ちょっと目には涙が浮かんだ状態で。

「妃杏様、皇王様方の周囲のSPを増員して厳重警備を開始致しております。現在のトコロはどなた様もご無事とのコトです。ご安心下さい。」

ドキン！！

そんな場合じゃないのに、久々には聞いた神楽の“ご安心下さい”にドキンとしちゃったじゃないのよ！！。

何て不謹慎な…。

神楽に肩を抱かれ、アタシは家の中に入った。

部屋に戻る間、ずっとあるコトを考えていた。

この前“決意”した、“あのコト”。

アタシが思い悩んでいるコトは、神楽にはお見通しだった。

「何かお考えですね？」

そりゃそうか。

顔に出てるだろうからな。

迂闊に考え事出来ないな。

ましてや好きな人なんか・・・

んんん??????

今、アタシ、尋常じゃナイ程に動揺してないか？

“好きな人”って。。。

このところ、今までずっと周囲がジェットコースター並に忙しくて、モーレツに波乱万丈でずっと考えてなかった。

昨日は昨日で璃音やパパママのコトしかアタマに無くて。

ぼんやりしているアタシを神楽はずっと心配そうに見ている。

神楽　　。

神楽の顔をじいっと見つめてしまっていた。

「妃杏様？」

はあああつつつ！！！！！

いけないいけない！！

ゴーンに引き戻された。

『神楽、御父様とお母様にコンタクト取って？』

アタシの突然の申し出に、さすがの神楽も戸惑いを見せた。

“「かしこまりました」”

ってシレ〜っと言いきりさげだ。

アタシは続けた。

『実はおとといから考えてたの。璃音を見送ったらサヨナラしようって。だから神楽も準備して。』

目を細める神楽。

「まだリミットまではありますがよろしいですか？」

こんな情けない神楽の顔、見たコトないよ。

何だかあまりの神楽らしく無さに、プツと吹き出しちゃうよ。

「妃杏様はお強いですね。ホントに感服致します。」

弱々しいけど、笑顔に変わった。

自分のPPに手をかざし、モニターを出した。

「おはようございます妃杏様。」

boss登場。

『おはよう。』

大きく深呼吸。

目に力を入れて毅然とした態度でbossに告げた。

『戻ります。お父様とお母様とお話し出来ますか？』

bossは一瞬息を呑んだ。

「お待ち下さい。」

そう言うのと画面が切り替わり、お父様の姿が現れた。

胸がギュッと苦しくなる。

お父様・・・。

不思議だった。

10数年も会っていないハズなのに、時間の溝が全然感じられない。

コレが血の繋がりののかなあ…。

お父様は唇を噛み締め、言葉を詰まらせているように見えた。

「話はゆっくり戻って来てからしよう。」

声が震えていた。

「もういいのか？」

涙を堪えてるように見えるお父様。

アタシはそんなお父様を見て、感情が昂っている。

顔が歪みそうになるのを必死で堪えて頷く。

お母様も現れて、お母様ひたすらは号泣している。

逆に“しっかりしなきゃ”って気が沸き起こってくるよ。

「妃杏…。」

泣き声で何度もアタシの名前を呼ぶお母様。

お母様の涙を見て、アタシは心臓が捻り潰されそうだった。

胸が“痛い”とか、“苦しい”とか、“締め付けられる”なんて在り来たりな感情では言い表せない感情に今、襲われていた。

泣き続けるお母様を見ていたら、自分の身勝手さが痛い程に感じて

“いきなり自分が2世紀先の未来の人間で、1ヶ月後には帰らなきゃいけない???バカ言わないでよ、アタシのこの10数年は何だったのよ!!!”

そう思っていた最初の頃のアタシ、どれだけ自分勝手だったんだろう。

アタシは孤児とは言えパパママの愛情に包まれて育ってきた。

だけど、お母様は自分の娘（しかも後継者）が失踪して、この10数年どれだけの思いをしてきたかを想像したら…………

この泣き姿が全てを物語っているように見えた。

“お母様ごめんなさい…”

口に出さずに、心の中で繰り返した。

口に出したら泣いちゃいそうだから。

胸に詰まされるような感情が拭えないまま、お父様とお母様とのコ
ンタクトを終えた。

如月が帰宅していた。

『ありがとう。』

涙声のアタシ。

「この部屋のモノは、PPにデータを取り込み済みです。あちらで
再生出来ます。いつでも発てますよ。」

そんなコトも出来ちゃうの？

何とイリュージョンな…。

良く見ると如月が、あの“エナメルツナギ”に着替えていた。

久し振りに見たなあ、コレ…。

初めて2人と会った時のコトを思い出してついついぼんやりしてし
まう。

ちょっと失笑。

「ワタクシは先に引き継ぎなどしておきますのでお2人で少しのん
びりなさって来て下さい。」

へっ????

続けて如月はアタシの耳元で囁いた。

「璃音様と一緒に時はあくまでもアニキでしたからね!。」

ああああ?

アタシ、かなりのマヌケ顔で如月を凝視。

でも、如月はそんなアタシを無視するかのよう、一瞬にして姿を消した。

.....

神楽と2人きり。

考えてみれば、完全に2人きりつてのは、最初に会った時だけだったね。。。

必ず誰か他にいたもんな。

けど・・・、

気まずくないか?

「どうぞ。」

神楽が箱を差し出した。

パパママへのプレゼント。

『ありがとう。』

微妙な雰囲気だわあ。

ちよっと今ビクツとしちゃったじゃないよ…。

気を取り直して箱を受け取ると、中は璃音に渡したモノと同じブレスレットだった。

『黙って置いてって、分かってくれるかなあ…。』

かなり弱気なアタシ。

でもしっかりアタシのストーンにくっつけて念じてみる。

ドキ……………ン!!!!!!!!!!

神楽の大きな手がアタシの両手を包んだ。

「大丈夫です。ご安心下さい。」

ひゃっつっつっ!

ま、ぶ、し、い…。

神楽の笑顔が眩しかった。

それにしても何なんだろう、神楽のこの“ご安心下さい”の、神通力がかったパワー。

ブレスレットは、さりげなくパパママの部屋のベッドのサイドテーブルに置いてきた。

ありったけの想いを込めて…。

『それにしても如月、2人でゆっくりって言ってもねえ…。』

気まずさ爆裂！

「本当に思い残すコトは無いですか？行き残したトコロなど御座いませんか？」

ドキドキしちゃう神楽の笑顔につられ、アタシはちょっと考えてみた。

『ドライブ…。』

神楽の顔が見れず、うつ向いて答える。

「かしこまりました。参りましょう。その後はそのままお戻りになりますか？」

うつ向いたままで、小さく頷いた。

「では、こちらにお着替え下さい。」

あっ…、エナメルツナギだ。

いやあ…、まさかアタシがコレを着るなんて…。

着替えが終わり、ドアを開けると、モデル立ちのような神楽が立っていた。

ドキドキドキ――――ン!!!!!!!!!!

スツと神楽の手がアタシの手元に来た。

ひゃああああああああ

心臓、殺人的にドキドキしてるでしょうがああああ!!!!!!!!!!

最近してたドキドキって、こんなドキドキじゃなく、良くないドキドキだったから免疫ナイよおおおお。

差し出してきた神楽の手にアタシの手を重ねた。

手、汗ばんでない？

大丈夫????

でも神楽はこんなコトでさえもきつと、任務の延長線ではないんだろうな…。

アタシ切なっ。

家に鍵を掛けた。

鍵を抜く手が震える。

鍵をポストに隠して、門を閉めて、小さくアタマを下げた。

泣かないように、大きく深呼吸。

いつの間にか“かゆいトコロに手が届くオトコ神楽”は門の前に車を横付けにしてくれていた。

しかも助手席側に廻ってきて、颯爽とドアを開けて待ってくれたりなんかして。

何なんだよコイツは！！！！

任務だって分かっててもドキドキするアタシの気持ち、読み取れよ
おおおお。

・・・それも気まずいか。

初めてだよ？ココまで異性にときめくのって。

それがよりによって任務上やってるコトだなんて、アタシ、可哀想過ぎるワ…。

でも、ツライコト全部、忘れちゃいそう。

戻ったら戻ったで、大変なコトがラッシュのようにやってくるだろうから、今だけ、ちよつとの時間だけ許してね。

でもやつぱりお兄様のコトは気がかりだな。

ついついぼんやりしてしまう。

エッ？PPが光ってる…。

ちよつと緊張が走る。

手をかざしてモニターを出すと、見たコトの無い程の険しい顔の如月が現れた。

「申し訳ありません、今すぐお戻り下さい！」

鬼気迫る如月の声に、神楽も顔が強張る。

何やら騒がしい。

「どうした如月！」

車を止めて神楽が問い詰める。

「皇子様が！」

??????????

神楽と顔を見合わせる。

『神楽！』

アタシも神楽も緊迫感全開！！。

神楽は頷いて、何やらステレオ部分に組み込んでいたモニターを操作して車を走らせた。

「イイですか？このまま参ります。」

『うん。お願い！』

一瞬にして外の景色が変わり、周りが歪んだ。

サヨナラ、アタシが過ごした街。。。

10数年ありがとう。

ずっと忘れないよ。

アタシの胸中は、“無我夢中”だった。

形振り構ってなんかいらなくて。

ストーンを握り締めて“お兄様”ってひたすら叫び続けて。

「着きました。」

神楽に言われ目を開けると、目の前には険しすぎる程の、やつれて

るよつにすら見える、如月がいた。

「妃杏様、こちらへ！」

如月は車のドアを開けてくれた。

アタシは如月の後をダッシュで追い掛けた。

試練

走るアタシの視界に見えたモノは、警備のSPに襲い掛かっている大勢のレジスタニアとお兄様の姿だった。

「如月、皇王様方は？」

冷静に神楽が尋ねる。

「パワードームに避難して頂いております。」

如月は汗だくで息を切らしている。

アタシは大きく深呼吸して大きく一步を踏み出した。

向かう先はお兄様達の元。

「妃杏様！」

「妃杏様！」

2人の間を割って入ってアタシは大幅で歩き続ける。

ストーンを握り締めて。

2人のアタシを呼ぶ声は叫びにも似ていた。

2人がアタシに駆け寄る。

アタシは表情を変えずに、2人に言った。

今までで一番迫力がある。

でも不思議と、恐怖感は全く無かった。

この前は“昂り過ぎると何も出来なくなる”って実感したけど、今は昂り過ぎて何も“感じなくなる”状態だ。

何かに取り憑かれてるかのようなお兄様を目の当たりにしてるにも関わらず、ドキドキもカラダの震えも無い。

昂り過ぎて何も感じないだけでなく、あの2人がいてくれてるって絶対の安心感もきつと、あるんだと思うな。

“妃杏様がいてチーフがいてワタクシがいる。怖いモノ無しですね！”

如月の笑顔が過る。

立ち止まり、大きくゆっくり深呼吸。

「お帰り妃杏。」

お兄様の声が鬼気迫っている。

でも怯まないよ。

毅然と構える。

アタシは依然としてストーンを握り締めたまま。

『ただいま。』

アタシも低い声で答える。

恐怖とか何も感じないケド、周りを見る余裕は微塵も無い！！！！！！
！（キツパリ断言）

神楽、如月、力を貸してね！！

もう一度大きく深呼吸。

「直接2人になれるコトを楽しみにしていたよ。」

そう言うお兄様の手の中から目を疑うモノが現れた。

思わず息を呑むしかなかった。

消えてなくなったハズのデッドストーンが今まさに目の前にあるのだ！！！！！！

さすがにちよつと怯む。

でも表情は変えない。

ひたすら強く祈り続ける。

「驚かないのか？」

薄笑いのお兄様。

お願い！ストーンのパワーでお兄様を助けて！！

「地下室を消したのは妃杏が朱雀に言ったからなんだろう？。余計なコトをするな！！！！！！」

急にお兄様は力任せに声を荒げた。

アタシはどうか自分でも分からなかったケド、とっさにお兄様の手からデッドストーンを奪い取っていた。

すかさずデッドストーンとプラチナムストーンをくっ付けた。

「妃杏様！！」

「妃杏様！！！！！！」

「妃杏！返せ！！」

みんなの悲鳴に似た声が掻き消される位の地響きが起こり、次第にアタシは立っていられなくなった。

揺れているのはどうやらアタシだけみたいで、お兄様がアタシに近付けずにもがいている。

揺れて良く見えないケド。

けどアタシはどっちのストーンも離さなかった。

自分でも良く分からない。

デッドストーンとプラチナムストーンは相反するモノ。

“ 何とかなるんじゃないか ”

つて、漠然とした想いだけがアタシを突き動かしていた。

ますます揺れが激しくなっていて、アタシの意識が遠退いて行く感覚に襲われている。

でも手は離しちゃダメ！

多分離せば揺れは収まるんだと思う。

でも、この揺れにアタシは猛烈に期待している。

何だか揺れすぎてアタマがボーッとしてきたよ？。

「 妃杏様 あ ! 」

如月？

絶叫してる？

「 妃杏様 ! ! ! ! ! ! ! 」

コレは神楽かな？

声が膨張して聴こえるよ。

何だかカラダが浮いてるみたいな不思議な感覚になってきた。

足が地に着いてない。

でも揺れは感じてる。

何だろ、この感じ。

エッ!?

ストーンが…。

指の隙間から七色の光が四方八方に放たれ始めた。

揺れが収まった。

あつつつ・・・、

デッドストーンがアタシの手を離れたかと思ったら、木っ端微塵に
砕け散り、お兄様の所に降り注いでその形を失った。

「皇子様!-!」

お兄様は気絶してその場に倒れ込んでしまった。

お兄様につられるかの様にアタシも気を失ってしまった・・・。

コレは夢？

アタシ、空に浮いてる。

ココは家の庭だ。

さっきの場所だ。

まさか幽体離脱？

それともアタシ、死んじやった？

「妃杏！」

エッ？

思わずキョロキョロする。

お、兄・・・さま？

地上には幼い頃のお兄様。

アタシを呼んでるのはお兄様？

じゃあ、もしかして…。

少し離れた所にいるのはアタシだ。

幼い頃のアタシ。

ってコトは夢？

でもアタシの感情、ヤケにリアルだぞ？

あっ！！

お兄様に呼ばれお兄様の元へ駆け寄ろうとしてアタシは転んでしまった。

「大丈夫か？」

お兄様??

すかさずアタシに駆け寄りケガの具合を確認してくれてる。

う　　っ　　っ　　っ　　！

アタシ、ソッコーで泣いてるよ。

泣き虫だなあ、相変わらず…。

お兄様はアタシをおんぶして歩き出した。

お兄様

不意に甦った。

幼い頃の記憶が。

って言っても2歳とかでしょ？

有り得ないか？そんな頃の記憶が甦るなんて…。

でも、今思えばこんな時期もあったんだなって、ちょっと胸が熱くなるよ。

「妃杏様!？」

エッ？神楽の声？？

何で？

あっ!!!!!!!!!!

目の前に神楽が…。

アタシは放心状態だった。

泣きも笑いも出来ないでいる。

でも神楽の表情が、ただ事で無いコトを物語っていて。。。

お祖父様もお祖母様もお父様もお母様も如月もbossもいる。

『お兄様は？』

アタシは飛び起きた。

慌てて神楽がアタシのカラダを支える。

「妃杏。」

えっ？この声は・・・。

みんな隣を見ている。

はああああつつつつ。

身体中、壮絶なまでのスピードで鳥肌が立った。

アタシの隣にはお兄様がいた。

狂気も鬼気も取り憑かれてる感も何も感じられない、無垢な笑顔のお兄様が確かにソコにいた。

『お兄様・・・』

まともに喋れない。

涙が止まらなくて。

お兄様が倒れたのと同時に、レジスタニアはみんなが見ている前で消滅してしまったらしい。

すでに捕えられていたレジスタニアの姿も無く、デッドストーンも完全に消滅してみたんだ。

お兄様はコレで完璧に解放されたのだ。

正直何だか良く分かんないけど、アタシ的にはお兄様が助かって何よりだ。

「ホントならオレも消滅してもおかしくなかったのにな。」

完全にバツの悪そうなお兄様。

アタシはまだ泣き止まず。

「妃杏様の危険を顧みない祈りが通じたんですね。」

神楽の顔にちよっぴり泣きの影が見えるのは気のせいだろうか。

「チーフ泣いてましたよ」

えゝ ええええええええ！?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!

声にならない叫び。

「チーフじゃないですね、もう。」

エッ？

何？如月の意味ありげな含み笑いは…。

・・・・・

あゝ ああああああああ

思い出したああああ！！！！

って言うか正確に言うと忘れてたああああ…。

「妃杏、責任者の件だが…。」

お祖父様からの催促。

はああああああああ。

ちよつと蒼白…。

軽くうつ向いて大きく深呼吸して、顔をあげるなり目に力を入れて
アタシは答えた。

『異存ありません。』

「やったあ！！」

如月が飛び上がって喜ぶ。

コレでもう完全にただの部下になっちゃうな。

悲壮感炸裂。

アタシは神楽の顔が何故が見れなかった。

気を紛らす為にか、如月の無邪気にはしゃぐ姿ダケを見つめていた。

10数年振りの感動の再会のハズが、とんでもない再会となつてしまつたアタシとお父様達。

アタシが起きた時からずっと泣き顔だつたお母様。

堪らずアタシに駆け寄り、強く抱き締めてくれた。

「お帰り妃杏。」

胸に突き刺さるお母様の震える声。

お母様の肩の震えがアタシにも伝わってくる。

気がつけば周りにはお兄様とお父様しかいなかった。

10数年振りの家族水入らずってヤツ？

不思議だよ、全く違和感が感じられない。

お父様も目を細めている。

「妃杏には本当に苦労を掛けてしまったな。」

アタシを抱くお母様にさらに抱き着いてきたのはお父様。

お兄様は隣で温かい目でみてくれていた。

『みんなの心労に比べたら全然平気だよ。周りの人に愛されて育ったから。』

嘘偽りのない、純粹な真実だった。

アタシのアタマの中にはパパママと璃音の顔が浮かんでいる。

自然と顔がほころぶ。

無意識的にアタシは指のリングに目を向けた。

もう片方の手はピアスに触れていて。

涙が滲んできた。

ブレスレット、分かってくれてるかなあ。

ちょっと不安。

でも大事にしてくれればそれでいいや。

アタシの中にはいつまでもみんながいるから。

「妃杏様、ご準備はよろしいですか？」

早速新しい生活が始まった。

今からお父様やお祖父様・bossの立ち会いの元、神楽の承認式が行われるの。

正式にアタシのセクションの責任者として。

アタシは正直胸が引きちぎれそうだ。

式の最中ずっと視線を落としたままで。

じんわり涙も浮かんで。

如月は素直に喜んでたけど。

確かにエージェントとしては万々歳よね？

次期皇王の責任者なんだから。

だからアタシも承認した。

しかもそばにいる神楽が責任者なんだからフツーに考えたらアタシだって喜ぶと思うわよなあ。

アタシだけだね、こんな悲壮感爆裂な顔してんの。

でも顔に出てたらみんなに疑われるからあくまでも微笑みを見せないと。

“笑顔”はムリでも、せめて“微笑み”くらいは見せないかね。

式が終わり、アタシは部屋に戻った。

ソファーに倒れ込むように腰を下ろし、大きくため息をつく。

これで良かったんだよね、コレで・・・。

神楽のこれまでの行為は、あくまでも“任務”でやったコト。

“優しさ”じゃなく、“任務”

だからホレちゃいけない。

神楽は幼い頃の恩義を忠実に果たしているだけ。

だからホレちゃいけない。

解ってる。

解ってるよ？。

なのに、涙が止まらない。

泣いたら、承認しなきゃ良かったってコトになっちゃうもん。

承認したのは、神樂の為。

神樂の地位の為！。

「妃杏様、よろしいですか？」

エッ？

b o s s が現れた。

慌てて涙を拭う。

アタシの前に跪く。

『隣に座つてよ。』

こんな泣き顔見られたくないでしょ！？。

「失礼致します。」

b o s s は自然に隣に座った。

さりげなくジェルシートを差し出してくれた。

『ありがとう。』

火照った顔にジェルシートを当てる。

冷たくて気持ちいい。

「妃杏様は後悔なさっておいですか？」

『ふえ？』

涙声だからか、ヘンな声になっちゃった…。

「神楽を責任者に承認されたコトです。」

ドツ……………キン

『何で？』

今度は声が上ずる。

白々しく咳払い。

「ワタクシの思い過ごしならお忘れ下さい。ただ先程、式の直前に神楽がワタクシの元へ参りました。かなり神妙な表情で。」

そうなの?? 知らなかったよ…。

「神楽は申しておりました。“責任者をお受けしていいのでしょうか

か”と。」

え、つつつつ???.??.?.

一瞬、強烈に胸が痛んだ。

思わずbossの顔を見てしまった。

「いざ自分が目標としていたモノを目の前にして、さすがの神楽も怖じ気付いたんでしょうね。“ワタクシでよろしいのでしょうか”と、実に神楽らしくない雰囲気でしたよ。」

フツと軽く笑うboss。

どうしちゃったんだろう、神楽らしくない。

でも解るな、神楽のそ言う気持ち。

いざ目の前にすると怯んじやうって。

「女性後継者様の責任者ともなると、全国民が注目致します。並大抵な人材では国民も納得致しません。」

まさかその事で怖じ気付いた??

んなワケ無いわよね、神楽に限って。

「それを思い悩んで言うコトはまず無いでしょう。その為に今までパーフェクトで来たんですから。思い悩む必要など一切ありませんから。」

ほつつつ。。。

ですよね！。

「ワタクシは申しました。“妃杏様にご承認下さったのだから自信を持って”と。ですから念のため確認に参りました。」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

『後悔してないよ。コレが神楽の為でしょ？神楽の夢が叶うんでしょ？？』

うつつつ、泣けてきちゃうよ。

「妃杏様は常にご自身より誰か人のコトをお考えなんですね。」

優しすぎるbossのコトバに涙が込み上げてきた。

ジェルシートで顔を隠してアタマを左右に強く振る。

そんなコト無いよ。

心の中で叫ぶ。

『如月や神楽にアタシの正体を明かされてからお母様の顔を見るまで、お母様の心情なんか微塵も考えなかったモン。自分のコトしか考えてなかった。』

涙ながらに訴える。

アタシの肩にbossの手が掛かる。

「そう思われるだけで十分ですよ。」

そう告げて。

アタシが琉冠星に戻って来て早4日。

波乱の幕開けから早4日。

2世紀未来の生活に慣れるのに精一杯。

気分は超一流イリジョニスト。

なんてのんきな場合じゃないのよホントは。

こんなクダらないコトを言いたくなるくらいハイパーに忙しいのよ？
毎日毎日。

正式な御披露目を控えてる為、朝から晩までずっとお祖父様の皇妃王教育を受けて、食事時はお母様のマナー教育。

10何年ものブランクは想像以上にキツかった。

毎日ヘトヘト…。

まるで皇室に嫁に来たみたい。

こんなに急激に詰め込まれて。

疲れた時は、手元のリングを見つめるんだ。

パパママが励ましてくれるような気がして。

今はすっかりリングとピアスが御守りだよ。

御守りって言うよりは、どっちかっていったら癒しの素ってトコかな。

神楽が毎日淹れてくれるコーヒーを飲みながらぼんやり空を見上げる。

神楽はよそそしいアタシにも全く変わらずに接してくれる。

当然だよ、任務なんだから。

それがアタシには、なおさら切ない。

でも神楽の夢は叶えてあげれたから。

10何年もバカみたいに、ずっと想い続けてくれたお返しはもう果たしたよね！？

はあああ。

「妃杏様？」

うわぁ!!!!!!!!!!

いつの間に現れたのよ！

声に反応して振り向くと、神楽がアタシの後ろに直立で立っていた。

ビックリしたぁ。。。

心臓、ドキドキしてるよ。

「最近御加減が優れないように見受けられますが。」

さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。 (↑血の気が引く音。)

『っ…、疲れ…てる???んじやな、、い?』

しどろもどろだ。

声が上がってる上に超力ミまくり。

「大変失礼致しました。気付かず、誠に申し訳御座いません。」

相変わらず神楽の顔は見れないけど、横目で神楽が直角にお辞儀しているのが分かる。

なぜだかアタシは涙が滝のように流れてきた。

「妃杏様??」

たじろぐ神楽。

アタシはたまらず深くうつ向いた。

『1人にして。』

ヒクヒク言わせながら告げた。

「ですが…、」

引き下がろうとしない神楽に、アタシは大人げ皆無で声を荒げてしまった。

『1人にして!!!。』

「失礼致しました。」

数秒の沈黙の後、神楽は逃げるようになくなった。

数秒が数秒に感じなかった。

途方も無い程に長く長く感じて…。

アタシは声に出して泣いた。

泣きじゃくった。

“わんわん泣く”

って、きつと今みたいな状態を言っただな、きつと。

やっちまったよ。

とうとうやっちまったよ。

サイテーだ、アタシ。

自分の気持ちが全くコントロール出来ないよ。

バカみたいだアタシ。。。

涙って1回にどれだけ出るんだろ…。

どこまでも止めどなく涙が出てくるよ。

空を見上げても涙は止まらない。

『あゝあゝあゝあゝ』

声にならない声をあげる。

どうしようアタシ　。

“ 妃杏様は常に他の誰かのコトをお考えなんですネ ”

boss、、アタシのコト、買い被りすぎてるよ…。

アタシ、そんな出来た人間じゃナイよ。

全然皇妃王としての素質もナイよ。

自分で自分がモーレッツに嫌になるよ。。。。

璃音！！あたし、今恋してるよ？。

璃音があんなに気に掛けてくれていた恋を今、してるよ…。

人を好きになるコトがこんなに切なく辛く、寂しいモノだなんて想像もしなかったよ……。

1人きりの部屋は、信じられない程に広く、だけど狭く、氷よりも遥かに比べ物にならない程に冷たい空間だった……………。

永遠

「妃杏様???」

ん っ っ っ!?!?!???

如月の声がしてないか?

涙を拭いて顔を上げて壁のモニターに目を向けた。

如月だった。

『何?』

手で顔を覆ったまま問い掛ける。

「マネージャーがモノ凄い取り乱して帰って来ましたがどうかなさ
ったんですか?」

ひやあああああ!?!?!!

モノ凄い勢いの冷や汗。

『ジェルシートちょうだい。』

話をはぐらかす。

「かしこまりました。お待ち下さい。」

こういう時の必須アイテム、ジェルシート。

注）ジェルシートの本来の用途は体温調整の為であり、泣き腫らした顔を冷やす為のモノでは決してナイ。

「お待たせ致しました。」

“かしこまりました”から何秒もしないで如月がシートを持って現れた。

フィルムみたいな薄さなのに、ヒンヤリ度抜群！

『気持ちいい…。』

思わず口に出してしまう程。

しかも、肌に触れてから、その時の体調に合わせてヒンヤリもホンワカも変幻自在なのがイリユージョンなのだ。

「オトコって、女性には想像も付かないくらい、単純なんですよ？」

アタシの間を、絶妙なタイミングで読み計って、如月は話し始めた。

『何よ突然…。』

横目でチラリと如月に目をやる。

ちよっぴりにらみ気味で。

「もしもワタクシが自分の幼い頃に、自分より幼い誰かに自分の窮地を的確かつ迅速に対応して頂いちゃったら、」

う え え え え
? ? ? ? ? ? ? ? ?

眉間にシワ寄りまくりで、なおかつ眉をつり上げる。

如月、

コトバが出ない。

如月がこんな話を話したコトだけで度肝が抜かれるつてのに、如月が続けたコトバに更に度肝を抜かれた。

「間違いなく初恋の相手でしょうね。」

ど
っ
っ
っ
っ
っ
か
-
-
-
-
-
ん。

脳天から火を噴いちゃいそうな勢い。

は・つ・こ・い・い・い・い・い・?・?・?・?・?

心臓も肝も目ん玉も飛び出るワ。

初恋は成就しないって、良く言わない？

「初恋が実るなんて、理想ですよ。」

如月の笑顔がヤケに胸に響く。

アタシが認める暴走オトコの如月に言われちゃったよ？？

「妃杏様にお仕えしたいの一心で約15年も持ちませんよ？しかもアカデミアに入る時から未だにパーフェクト取り続けるなんて、並大抵の覚悟じゃ出来ないですよ？」

覚悟おおおお？

『もともとなんじゃないの？あの神楽のコトだもん、手抜き出来ないダケなんじゃないの？』

疑いの眼差しのアタシ。

「確かにそうかも知れませんが。だとしたって、次期皇妃王様のマネージャーですよ？国民からの注目を集めるんですよ？並の根性じゃそんなポジションに入る時からずっと想い続けるなんて出来ませんよ。」

如月、熱くなつてないか？

『だからウルトラスーパースペシャルハイパー生真面目だから、助けてもらった時の恩義を忘れなかったダケでしょ？如月がアタシに土下座してくれた時言ってたモン、“これでまた1人、妃杏様に忠義を尽くすモノが増えちゃいましたね”って。』

アタシは真つ向否定。

アタシの強情さ（？）に呆れ果てて深い大きなため息をつく如月。

でも、・・・ふと不思議に感じる。

この前bossも言ってたよね。。。

“「女性後継者様の責任者ともなると、全国民が注目致します。並大抵な人材では国民も納得致しません。」”

って…。

今、如月も言ったよねえ、同じコト。

『どうして?』

ちよつと弱気な声。

「はっ?」

『bossも言ってたよ?さっき如月が言ったコト…。』

さつきとは一変、しおらしい様子のアタシに如月は躊躇うコトなく答えた。

「どちらですか?」

困った顔じゃなく、清々しいばかりの笑顔で。

『“アタシの責任者は全国民からの注目を集める”って話…。bossは“並大抵の人材じゃ納得しない”っても言ってたよ?』

ちよっぴり声が震えてる。

アタシの質問、そんなにクダらなかつた？

如月、呆れ笑いして。

「ホントに妃杏様はピュアですね。ワタクシまで妃杏様にホレちゃいそうじゃないですか！」

ぎゅiiiiiiiiん！！！！！！

胸が捻り潰される想いにさらされる。

「お考えになつて見て下さい！独身女性の、しかもイイお年頃の御方のお側に常に男性が居て、身の回りを世話するんですよ？妃杏様じゃなくたつてそりゃホレますよ！！」

.....？

『だつて他にも居るでしょ？今だつて現に如月だつているし、アタシに限らず付くエージェントは1人じゃないでしょ？』

全く理解に苦しんでいるアタシ。

「まあそうですが、否が応でも注目が集まるワケですよ。誰よりも常に一緒なんですから、もし仮に後継者様に想う方が現れた時、マネージャーには隠せないわけですから、言わば将来のパートナーを見極める役割も国民的には期待するワケですよ。」

ドキiiiiiiiiん！

“将来のパートナー”・・・。

何てまた先の話を。

「すなわち、“並大抵の人材じゃ納得しない”ってのは、そう言うコトでございます。」

しゅううううう ↓↓↓↓↓↓（気落ちする音…。）

神楽の前に誰か他の男性がいて、神楽はその人を見ているしか出来ない・・・。

今のコトで精一杯で、まだまだ先の話過ぎてあまりピンと来ないけど、漠然と想像しちゃう。

アタシの隣に今は知らない誰かがいて、その後ろに毅然と立つ神楽の姿を。

ぐわあああつと感情が込み上げて来て、涙より先に嗚咽していた。

「妃杏様？妃杏様？？」

如月の声がおかしい。

不審そうな声だ。

「また暴走しておられませんか？」

へっ？

アタシの顔をグイッと覗き込む如月。

「今、 “ パートナーを見極める役割 ” の方を考えておられませんか？」

ひえつつつ???

ただ頷く。

如月は猛烈に大きなため息をついている。

「難しいなあホントに！」

なぬつつつつ???

アタマを掻いて困り果てている如月。

「妃杏様がお目覚めになるまでの間涙を浮かべたり、さっき取り乱してたのだってホントのコトなんですよ？どうしたらワタクシの言ってるコト信じて頂けるんですか？本人連れて参りましょうか？今頃憔悴しきってると思われませんが…。」

ぴやあああああああ！！！！！！

んなコト、ムリ無理むりい！

激しく音を立ててアタマを左右に振る。

如月、しかめっ面。

出来るワケないじゃん!!。

走ったワケでもナイのに、はあはあ言っちゃうよ…。

すっかり涙は引いていた。

『もうイイよ、ありがとう…。』

これ以上、如月に何か言われたら確実に心臓に悪いから。

「失礼致します。」

呆気なく如月はいなくなった。

ふうふうふうふう。

全魂が出ていっちゃうんじゃないかって程のため息をつく。

“憔悴しきつてる”????

“取り乱していた”????

そんなワケ無いじゃない!!

あのロボットエージェントがそんなコトで取り乱すだなんて!!!!

何言ってるの? 如月ってば…。

おかしすぎてへそでお茶を沸かしちゃうワよ。

つたく。

。

つ、た…くううう。

そんなワケ・・・、無いじゃ、、、ナイ。。。

心は穏やかじゃなかった。

全然落ち着かなくて。

ヘンな汗掻いて。

ダメだ、こんな時は空を眺めよう。

ひゅううううううううう…。

アタシの心の中に、風が吹いている。

「妃杏？イイかなあ。」

モニターに現れたのはお父様だ。

お父様がいらっしゃるなんて、何だか緊張。

『ハイ。』

作り笑いで応える。

アタシは立ち上がり、お父様をお迎えした。

「神楽、妃杏の部屋にコーヒを2つ。」

[illegible]

あちやああ・・・。

今一番聞きたくない名前なのに……。

ほんの一瞬取り乱す。

目がつり上がってしまう。

お父様が座ったのを確認してアタシも座る。

「妃杏には想う相手はいるのか？」

いやあああああ！！！！！！

瞬速で顔が赤くなった。

だけどバレないように、必死に取り繕う。

「おれません。」

落ち着け！！アタシ。

しかめっ面で返事。

ダメだ、苦しい…。

コーヒードもつ。

お父様はご自分のプラチナムストーンを手にして話し始めた。

「にわかには信用出来ないだろうが、このストーンには現代科学ではとても証明出来ない様々なパワーが隠されておる。妃杏も度々目の当たりにしてきていると思うが。」

黙ってただ頷く。

「しかも持つ者によってもまた、秘められたパワーが異なるコトもこのストーンの特徴だ。」

アタシはジツとお父様の目を見て話を聴く。

心の動揺をお父様にも神楽にも見抜かれないうように。

「だが、私にも父上にも、歴代の皇王様方にも共通しているコトがあつてな。私も初めは信じ難かつたが、誰か想う相手が現れたら、その人が運命の、自分にとってのオンリーワンの相手だという証拠のようだ。」

[illegible]

このストーンにはそんな力もあるのか？

顔面蒼白その2

さあああああ。（全身の血の気が引く音再び。）

大撃沈だアタシ…………

「明日で妃杏も１７歳だ。そろそろ憶えていて欲しいと思ってな。」

ほえ??????

眉間にはシワ、でも目尻は下がっているアタシ。

わ・す・れ・て・たあああ
↓ ↓ ↓

明日誕生日か、アタシ…。

自分の誕生日も忘れるなんてアタシ、どれだけハイパーな毎日だったんだろう。

そっか、アタシ、もう１７歳になるのか。。。

じんわり感無量。

ふううううう。

コーヒーを一口。

落ち着くな。

お父様も神楽も居なくなり、再びアタシは１人になった。

神樂がアタシのオンリーワン………??

そんなあああ…。

切なすぎる。

ふううううう。

さつきからため息ばかり出ちゃっなあ…。

はあああああ。

まただよ。

どうしよう。

「妃杏様ああ!!!!」

急に騒がしくなった。

再び如月だ。

しかも何だか慌ててるよ？

『何よお。』

モニターから出るに出来ない如月。

モニターに現れても、許可が出ないと部屋には入れないから。

「マネージャーが見る影も無くなって帰って来ましたよ!？」

ハンパない程にコーフンしている如月。

『知らないわよ。』

アタシ、素っ気なく言い放つ。

「まだ信じて下さらないんですか？」

如月、キレ気味？

「入りますよ!」

うわっっっ!!! 強行手段かよ

やっと心臓落ち着いたつてのにテンションmaxの如月が現れた。

「何も言ってくれないから皇王様にお伺いして参りました。」

『ちよつとおおお!!!』

堪らず怒鳴る。

「何で仰らなかつたんですか? 想う人がいるって!」

如月もキレてる???

『言えるワケ無いじゃないのよ、自分のマネージャーだなんて!』

大声で叫んだ。

「そのせいでマネージャーは“自分は妃杏様にとってただのエージェントでしかない”って思い悩んでるじゃないですか！！！！！！」

えっ つつつつつつ???

顔を赤くしたまま強張る。

『まさか……。』

か細い声で反論。

「皇王様にはいくらなんでもワタクシが言つのは筋違いですので申しませんが、マネージャーどうするんですか！」

かああああああああ。

顔面大噴火！

『知らないよ！』

力の限り叫んでアタシはベランダに出た。

『神楽はアタシのコト、後継者としてしか見てないんでしょ？何するにも任務でしか無いんでしょ？』

叫びながら目には涙が溢れそうな程に溜まっている。

「ワタクシは妃杏様の御側に居られさえすれば幸せです。」

＊
≡ @ ∞
↓ ← ↑ → ??? ???

神楽???

幻聴？

でも怖くて振り向けない。

「いずれは妃杏様に運命の御方が現れて、来るべき時が来ても、一生妃杏様にお仕えさえ出来れば本望だと思っておりました。」

間違いない、神楽だ…。

『勝手に入って来ないでよ!!』

恥ずかし過ぎて、ごまかしきれなくて裏腹なコトを口にしてる。

今のアタシ、かなりテンパってるよ？

マネージャーは非常時の為に、いつでも許可無しで入れちゃうのだ。

「子供の頃に妃杏様に助けて頂いて以来、妃杏様にお仕えしたい一心でここまで参りました。他の誰にも妃杏様に付かれないと、一心不乱でパーフェクトをキープして参りました。」

そ、ん、な、ああああ。

如月のコトバが過る。

“取り乱していた”

嘘じゃなかったんだ。

アタシを煽るだけじゃなかったんだ…。

【だから言ってるじゃナイですか！】

いつの間にかいなくなった如月の叫びが聴こえて来そうな気がした。

ゴメンね、如月……。

泣きながら如月に心の中で謝る。

【ワタクシがいなきや何も出来ないんですか？】

如月のイヤミも聴こえた気がした。

「妃杏様が御幸せであれば本望でした。」

神楽の心音が聴こえそうな程に神楽と密着している。

神楽の声がすぐ耳元で聴こえる。

低く、柔らかな、温かい、優しい声。

泣かずにはいられないよ。

「ですが、先程皇王様からあのようなお話をお伺い致しまして、お恥ずかしながら心中は全く穏やかではありませんでした。」

“見る影も無くなって帰って来ました”

如月がコーフンするのも無理ナイか。

神楽の声がダイレクトにアタシのカラダに響く。神楽の息づかいも伝わってくる。

「エージェントとしての自分の誇りは頑丈だと思っておりましたが、どうやら思い上がりだった様です。」

ひえつつつ???

「“どなたか想う人が現れたら、その方が運命の相手だ”という御言葉で、ワタクシの薄っぺらのエージェントとしての誇りはもうくも木端微塵に砕け散りました。」

ちゅどーーーーーーん←（アタシの我慢の限界が崩壊する音。）

「他の誰かと妃杏様が一緒にいられるかと思ったら、とたんに自分の感情がコントロール出来なくなってしまっている自分がありました。」

アタシは無意識に、力一杯神楽を抱き締めた。

『ずっと我慢してた。勝手に“神楽はあくまでも任務でやってるだけだ”って思い込んでいて、如月に何言われても受け付けなかった。

バカだよねアタシ…。」

神楽の力も強くなる。

『だからお父様に話を伺っても、嬉しいじゃなくて悲しかった。だから如月と激突しちゃって。』

神楽はアタシに回していた腕を離し、アタシの目をジッと見て言った。

「上司として、如月の失態を深くお詫び致します。申し訳ありません！！」

啞然。

数秒後、失笑。

神楽は“コレ”が神楽なんだね。

もう、どうしようも無いんだね。

boss、神楽は不器用なんかじゃないよ！？。

“言葉が少ない”とか、“自分を出さないから誤解を招きやすい”ってのは否定出来ないケド…。

ウルトラスーパースペシャルハイパーに真面目なダケだよ。

やっと自分を出せたのに瞬時に上司の顔に戻る、器用な人間だよ？

思いだし笑いしちゃう…。

きやつつつつつ!!!

また神楽のカラダが

密着っ!!

またドキドキしちゃうじゃないのよお!

「妃杏様をお慕いはしていても、妃杏様に見合う自信は正直全く無く、ならばエージェントに徹しようと、自分に言い聞かせておりました。」

神楽の発する声の振動が、ストレートにアタシにも伝わってくる。

それがなぜだかとっても心地好い。

「アタシなんか勝手に自分で思い込んで勘違いして神楽を傷付けてゴメンナサイ...」

神楽の力が再び強くなる。

「ウチらって、似てるのかなあ。」

「かも知れませんか!。」

神楽の声が弾んでいるのが分かった。

アレ?

神楽のカラダがまた少し離れた。

きやあああああああ！！！！！！→→→→→

神楽の顔が超接近中！！！！

コレってもしかしてもしかする??????

アタマの中真っ白。

びゃー――――――←→↑?

心臓、壊れるワ確実に…。

ケド、何とも言えない解放感を今、感じている。

アタシの人生初のfirst kissは、サイコーにhappy
でcuteでcoolでunbelievableでExcellent
だった。

その瞬間、夜にも関わらず、辺り一面何とも神々しい光が広がり、
幻想的でかつ神秘的な空間に変わり、星が降って来ているかのよう
なキラキラしたモノが降り注いだ。

アタシと神楽を祝福しているかのような錯覚に陥り、ウチらはいつ
までもずっとそのままだった。

恐らく何時間も経ってないだろうに、とてつもなく永い、永遠的な
時間を過ごしていた。

『神楽の仕業?』

「とんでもございません。ストーンの力ではないでしょうか？」

キラキラした星みたいなモノはいつまでも降り注いでいた。。。。

翌朝 - - -

「おはようございます妃杏様。お誕生日おめでとございます。」

『おはよう如月。ありがとう。』

心無しか、顔は緩み切っている。

如月の顔が気味悪い程ニヤケている。

『いろいろありがとうね、如月。それと、ゴメンね、信じられなくて。』

照れながら。

「申したハズです、ワタクシはお2人に幸せになって欲しいだけです。」

如月が猛烈に輝いて見えるよ…。

みんなでの朝食。

毎朝の通例。

アタシは当然ご機嫌で顔が緩みっぱなしだけど、（バレないように必死で取り繕っているけど。）気のせいだろうか、お父様もお母様もお祖父様もお祖母様もお兄様も、周りのエージェント（神楽と如月を除く）も何故かニヤニヤしているように感じて仕方無いんだけど・・・。

まさか如月？？？

如月をキツくにらむ。

如月は激しく否定。

じゃあ まさか神楽なワケ、、無いよなあ…。

気のせいかな。

如月も神楽も不審に思いながら、何も言えないまま食事は終わった。

「そうだ妃杏、昨夜の話に続きがあるのを忘れていたなあ。」

へッ??????

何だよいきなり。

意味ありげなビミョーな笑みのお父様。

みんな同じ様な顔してるよ？

アタシは如月や神楽と顔を見合せてきよんとする。

如月も神楽も首を傾げる。

「オンリーワンの相手と無事結ばれた暁にはプラチナムストーンを通じてプラチナムマウンテンが反応して、2人を祝福してくれるんだ。」

ぶうううううううう。

コーヒーが口の中に入っていたアタシはコーヒーを吹き出し、死にそうなくらいに噎せまかった。

まさか昨夜の光と降り注いでいたモノは……。

神楽も解りやすい動揺を見せている。

純粹な満面の笑顔なのは如月で。

「おめでとう、妃杏。」

菩薩のような微笑みはお母様。

周りを見ると、みんながみんな温かい眼差しを向けてくれていた。

恥ずかしくてうつ向かずにはられないよ。

みんなにバレバレだったの?????

まさか昨夜のコトはお父様の策略?!?!?!

穴があつたら（無くても）入りたいよおおおお!!!!

「おめでとうございます妃杏様。」

「おめでとう、妃杏。」

顔が大噴火。

顔がいくつあっても足りないよ!。

かくして、昨夜の出来事は当然全国民も知るトコロとなり、

アタシの誕生日お祝いを兼ねたアタシの正式な全国民へのお披露目のセレモニーは、

自動的に、同時にアタシのパートナーのお披露目も兼ねてしまうコトになるのだった。

「おはようございます妃杏様。」

『おはよう神楽!。』

あれから何カ月経っても神楽は依然として、マネージャーモードの神楽のまま。

「神楽様あ! いい加減に妃皇王様らしくお振る舞い下さい!」

如月に今日も怒られてる神楽。

「オレはまだマネージャーだ。オマエが正式にマネージャーになるまでは妃皇王よりもマネージャーが優先だ!」

神楽はマネージャーをやりつつ、妃皇王（女性後継者のパートナーの役職）となり、如月はアタシと神楽の直々の希望で、研修期間を数ヶ月残してサブマネージャーになった。（もちろん特例中の大特例!）

って言っても、神楽がいるのを分かってそれでも就きたいなんて奇特な人がいないって説もあるんだけどね…。

「そんなんだからマネージャー誰もやりたがらないんですよ!？」

一番変わったコトと言えば、如月が神楽に平気で楯突くようになったコト。

「オレがいるんだからオマエで十分だ！」

神楽は相変わらず。

何だか漫才見てるみたい。

ホントにこの2人はいいコンビだよ、呆れるくらいにね。。。

“妃杏様がいてマネージャーがいてワタクシがいる。こんな最高のコト無いですよ。”

今もこういう光景を見る度に、あの時の如月のコトバが甦る。

このままずっと続くんだろうな、きっと。。。

コレにいずれは家族が増え、如月にも運命の女性が現れて…。

正直なトコ、未来なんて全く想像つかないよ。

でもきつと、明るい未来が待っているコトは間違いないな。

だって、アタシと神楽と如月がいれば何も怖いモノなんかありません。ないんだから……！！

ストーンと、パパママから貰ったリングと、璃音とお揃いのピアスもずっとずっと永遠に見守ってくれているから……

f
i
n
.
.
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n28111/>

虹の彼方へ

2011年11月16日14時35分発行